

305
35

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁹ 1 2 3 4 5

始



505-35

吾等何を學ぶべき乎

(9)

文學士 淺野利三郎 著

心理の話

世界思潮研究會版

大正
11. 11. 8
内宛

はしがき

吾々は生活する。しかし生活とは何のことで、生活する者は誰であるか？ 馬鹿なことを訊いてゐると言ふ人もあるだらう。寧ろ大概の人はさう言ふに違ひない。さういふことを言ふ人の心になつて、私が代つてこの間に答へるならば、それは『勿論、自分達だ。』といふことである。けれどもその勿論は、少し考へると決して勿論ではないので、如何なる大哲學者と雖も、この『自分』といふものを本統に知つては居らないのである。自分の本質、中心、核心は、『心』でなくてはならないとは、先づ誰でも氣のつく所であるが、その『心』といふものが實に千古の不可解事であるのだ。

心を説明しやうといふ企は、有史以來常にあつた。昔の人生哲學、倫理學などは皆これであるが、その方法は根本から誤つてゐた。心といふもの、つまり精神現象を對象とする

本統の科學の成立したのは、最近數十年このかたに過ぎないからして、その成績も未だ大いに見るべき程のものはない。このやうに、精神現象の科學——心理學——が幼稚であるからと言つて輕蔑してはならない。心理學こそは凡ての精神科學の基礎科學であるから、例ひ現在は如何に幼稚であらうとも、吾々の精神そのものと精神の作用との根本的理解は、心理學を措いて他に求めることが可能ないのだ。

ところで、現在の心理學は大凡どれほどの成績を擧げてゐるかと言ふと、精神そのものの説明は、未だ幾らもついて居らない。けれども精神の働きの、その働きを起させる身體の仕組とは、既に大分正確に説明や解釋が施されて、吾々の精神そのものも臆氣に想像できる位にまで進んでゐる。だから現在までの心理學の知識を得れば、少くも吾々の精神的活動と肉體との關係や、精神的活動の大凡の理窟だけは解かるわけで、従つてとにかく生活の中心概念は握つて行けるのである。

その外に、家庭生活や、小供の教育や、自分の修養や、社交談話その他の實際的方面に對つて、心理學の應用すべき範圍は甚だ廣汎である。加之、近頃は思想界の動搖が誠に激甚を極めてゐる。故にこれに對してこれに捲き込まれず、嚴に自分の地歩を保つて社會に獨自の存在を主張し得る爲には、到底過去の戒律的定型を永く墨守するを許さない事情の下にある。つまり吾々が進んで社會に活動し、退いて家庭に自らを持する爲には、必ず科學的常識を欠いてはならない。そして科學の中でもこの心理學は、自然科學に於ける力學と共に、精神科學に於ける基礎科學であるからして、人が心理學的常識を持たない場合は自ら時代遅れの舊人たることを覺悟せねばならない。

即ち、本書はこの心理學的常識を與へるために、稍詳しい心理學の概念を述べたものである。だから理論よりも事實、深さよりも廣さを目安にして編叙した。そして一般概念を叙してから、心理學の位地、心理學内の分科に及び、最後に簡單に應用を示して置いた。

要は、心理學の概念と常識を與へることにあるから、この書が卷末の參考書目の中の、せめて一冊だけでも進んで讀むだけの興味を讀に與へることが出来れば、正に最大の成功である。

著者

目次

第一章 精神現象の概観……………

一 經驗と精神現象

經驗——直接經驗と間接經驗——原始的經驗——純粹經驗——常識——學問的世
界觀と常識的世界觀——物質と精神——客觀と主觀——精神現象——意識現象
——意識現象の四性質——「意識の流」。

二 精神作用の特質

意識は精神の本質——注意と記憶——意識の表出性。

三 精神作用の概観

A 物心平行論

精神と肉體との關係——物心平行論——相制説。

B 感覺運動論

目次

刺激と反應—感覺と運動—神經の生理解剖的組織—求心性神經系統—
遠心性神經系統—聯合性神經系統—根本形式—無反應と自發運動—觀
念運動—刺激と運動の連鎖。

O 循環活動

閉循環—動機—運動—變化—二重動機—動機變換。

D 意識の分析

意志過程—精神活動の單位—動機の要素—觀念と感情—感覺と感情—
意識界の二分—分類表。

第二章 精神の要素と法則……………二〇

分析—全體を理解する手段—刺激と注意—意識過程—抽象—要素。

甲 抽象的要素

純粹感覺—單一感情—機能的假定的單位—分析的現實的要素—抽象的
斷片。

一 感覺(純粹感覺)

感覺刺激—內部感覺刺激—外部感覺刺激—中樞感覺刺激と非中樞感覺
刺激—一般刺激と特殊刺激—感覺分類表。

A 中樞感覺

幻像—幻音—夢—幻覺。

B 有機感覺

消化機官感覺—呼吸機官感覺—血行機官感覺—排泄機官感覺—生殖機
官感覺—平衡感覺—全身感覺。

C 運動感覺

關節感覺—腱感覺—筋肉感覺。

D 五官感覺

觸覺—皮膚感覺—皮膚感覺機官—壓覺—痛覺—痒覺—癢覺—溫覺—冷
覺—乾覺—濕覺。
味覺—嗅覺—劣等感覺—近官。

目次

四

高等感覺—遠官—近官と遠官の比較—聽覺—調音—騒音—純音—調子
強弱—音色。

視覺—光覺—色覺—原色—色盲—殘像。

E 感覺と刺激との關係

強度の關係—覺阈—覺頂—ウェーベルの法則—辨別阈—フエヒネルの
法則。

形質の關係—感官順應の分化—刺激形質の差—振動數。

二 感情(單一感情)

主觀的方面—主觀的といふこと—認識の主體—限界概念。

A 單一感情の種類

感情三方向説—快と不快—興奮と沈靜—緊張と弛緩—中性狀態。

B 單一感情の特質

主觀性—明瞭性の缺乏—間接的注意の對象—對立性—協同表出性—感
情價—鈍摩。

C 單一感情の結合

部分感情—全體感情—融合性—移轉性—放散と推移。

D 感情の本質

事實の問題—感覺の屬性—有機感覺の融合—ジエームス・ランゲ説—

特殊感覺説—ストウムプの感情感覺説—獨立せる要素。

説明の問題—生理的機制—生物學的意義。

乙 基本法則

意識活動の法則。

一 注意

意義—度合—範圍—條件—刺激の強度—刺激の變化—刺激の新奇—刺
激の慣視—刺激の反覆—刺激の感情價—受動的注意と能動的注意—注
意の惰力—注意の動搖—集中作用と抑制作用—注意の效果—注意作用
の本質—生理的基礎—反射禁止作用—開路作用—生物學的意義—精神
力の經濟。

目次

五

二 記憶

記憶作用—銘記、把持、再生—記憶の本質—經驗の再生—再生の條件—忘却—生理的説明。

第三章 精神の機能と統一……………五三

甲 具體的要素

精神の機能—綜合的見方—精神過程の形式—三分法—部分的活動—具體的構成要素—機能的要素。

一 知覺

知覺表象—觀念—知覺作用—感覺と觀念の別—觀念の四特質。

A 空間知覺

空間表象—觸覺的空間表象—觸空間—定位作用—視覺映象—視覺的空間表象—視空間—成立條件—網膜映象—動眼感覺—第二次的空間知覺。

B 時間知覺

時間的屬性—觸覺的時間觀念—觸覺運動—步行運動感覺—聽覺的時間觀念—時律—時律的運動。

C 變化と運動の知覺

變化の範圍と時間—身體運動の知覺—外物運動の知覺—運動と靜止。

D 知覺の錯誤

錯覺—中樞的錯覺—末梢的錯覺—正常錯覺—空間的正常錯覺—時間的正常錯覺—幻覺。

二 感情

感情の本質—具體的感情過程—複合感情—情緒。

A 複合感情

全體感情—部分感情—高級部分感情—低級部分感情—全體と部分との關係—普通感情—簡單美的感情—調和の感情—色彩調和—樂音調和—比例の感情—時律調和—形狀調和。

B 情緒

目次

C 情緒の意義—複合感情との別—成立條件—情緒の經過—現實的感情。

知的感情—論理的情操—倫理的情操—宗教的情操—美的情操。

三 意志

A 意志の本質—意志過程—意志過程の特徴—意志作用。

意志の動機

B 動機の主成分—衝動、本原的意志作用、衝動的動作—二次的意志作用。

意志過程

活動感情—意志過程の基礎—決定感情—履行感情—満足感情。

C 意志の分類

結果の分類—内部意志作用—外部意志作用—動機の分類—簡單意志

作用—復雜意志作用—衝動作用—有意作用—動機及び發達の分類—

衝動、有意、選擇作用—決心感情—決斷感情。

D 意志の自由

自由の意味—主動機と副動機—性格、品性—非自由な意志—自己決定。

乙 精神的結合と統一

一 精神的結合

精神的結合の意味—受動的結合—能動的結合。

A 聯想的結合

受動的—感覺の融合—類化—辨別、再認、認識作用—混化。

B 統覺的結合

能動的—受動能動協同作用—分解作用—想像作用—受動的想像—能動

的想像。—理解作用—根本動機—經驗の意識的統一。

二 精神的素質

A 知的素質

記憶素質—統覺型—聯想型—視覺型と聽覺型—天才型。—想像素質—

藝術的素質。—理解素質—科學的素質。—直觀と觀念—組合せ表—才

能—觀察的才能—發明的才能—分析的才能—思索的才能。

B 情緒的素質

氣質—情緒的素質分類表—多血質—神經質、黑膽汁質—膽汁質—粘液質—人種的氣質—長所の利用。

C 意志的素質

性格—氣質と性格の區別—量的分類—質的分類—性格學。

三 精神的進程

精神全體の過程—意識の發展の經路。

A 意識成立の條件

意識の定義—意識の出現に附隨する條件—精神的作用の相關結合—神經系統の相關結合—意識成立の生理的基礎。

B 意識の發程

意識の發端—意識發展の初期—意識結合の中心點—恒常內容。

C 自我意識の發達

自我意識の初步的段階—自我の支持者、統覺作用—高尚な自我意識—

自我の本質—觀念か感情か—統覺作用と結合した感情—身體我—精神我。

D 我と物の對立

物心二元—我と物、主觀と客觀—常識的ニル觀—哲ハ的一元論—論理的區別。

E 人格と個性

人格の本質—人格と自我—心的活動の恒久的要素—心的活動の根本的實體—常識的見方—心理學的見方—境遇と個性—個性ハ理ゾ。

第四章 心理學的諸問題……………九五

一 心理學の地位

精神科學—文化科學—ヴントの所說。

A 精神科學の起原

哲學、人生哲學、倫理學、精神科學。—哲學、自然哲學、宇宙論—心

目次

目次

理學。—精神科學の成立難—その理由。

〔B〕 精神科學の對象

自然現象と精神現象—人類—精神科學の對象と自然科學の對象。

C 基礎科學としての心理學

個人の認識—種屬的—精神科學の研究的根本條件—心理學の對象としての人類—基礎科學—心理學の現狀と任務。

D 心理學の位置

標準—先決問題—基礎科學と眼界領域—精神科學と自然科學との橋渡し—普通心理學—精神物理學—民族心理學—教育學—普遍的精神科學—心理學的科學—特殊精神科學—普通と特殊との交渉—歴史科學と社會科學—特殊精神科學の目次。

二 心理學の對象

研究對象—從來の二派—直接經驗の學—自然科學は間接經驗の學—見方の差—對象の差—精神現象と物質現象—歸屬の差—心理學的精神。

三 心理學の研究法

經驗の省察—觀察、實驗、推究、法則、證明。

A 内省法

自己觀察—特有現象と一般的事實。

B 觀察法

外部觀察—特殊心理學。

C 實驗法

人爲的—經驗反覆の利。

四 心理學の分科

健康、成人、人類、個人—一般心理學。

A 對象による分科

特殊心理學—一般特殊比較表—變態心理學—精神病學、犯罪心理學、催眠心理學。—兒童心理學—青年心理學。—性慾心理學。—動物心理學—比較心理學。—團體心理學—社會心理學、群集心理學—民族心理學。

目次

目次

一四

B 方法による分科

内省心理學—實驗心理學—精神物理學、生理的心理學、—行動心理學。
—沿革による分科—知的心理學—感情心理學—聯想心理學—能力心理學—意的心理學。

五 心理學の應用

精神科學の立脚地—倫理、美學、教育學、宗教學。

A 醫療と心理學

精神治療—心理療法—催眠心理學の應用。

B 法律と心理學

罪跡の發見—證言の査定。

C 教育と心理學

教育心理學—低能兒教育—感化教育。

D 修養と心理學

心理的内省—原理の應用。

E 實業と心理學

廣告—販賣—勞作形式の改善—適任者の採用—能率心理學。

F 社交と心理學

心理學的常識—對人關係の圓滑—情味—日常生活の圓滿と愉快。

六 參考書目

A 一般心理學參考書目

B 特殊心理學參考書目

目次終

目次

一五

心理の話

一、精神現象の概観

一 経験と精神現象

『今日は心理に就いて話せといふことだが、現今の心理学は、理論にばかり頼つては居ないのでから、かうだからかうと論理を追つて、座蒲團の上で話ばかりの運びをつける譯にいかない點が大分ある……。つまり、理窟ではなくて事實の上に基礎を置かねばならないから、矢張り實驗によつて動かすべからざる事實を目撃するのではなくては、合點の行かない個所も出て來るのだ。』

『いや、僕は何も専門的に研究しやうといふ心算ではないので、ただ心理上の學問に就いて稍詳しい概念を得て置きたいといふに過ぎない。だから、本統ならば實驗に訴へねば分つたとも分らぬとも言へない點もあらうが、それは凡て君を信用して、君がかうだと言ふならば大人しく承認

精神現象の概観

して聞く。決して「そんな筈はない。」などいふ、大それた抗辯はしないから、何でも解り易くやつて貰ひたい。』

『それだけの覺悟があるならば、一つやつて見るとしやう。……何に限らず、怎んな學問でも常識が土臺だ、仍で先づ常識的に考へて、吾々の心の中に出てくるものを、引つくるめてこれを經驗と呼ぶことにしやう。』

『始から少し勝手が違つて來た。普通、經驗があるなどといふ場合には、主に行爲の方面に限られてゐるやうだね。』

『勿論、それも經驗には相違ないが、今は「心」といふ此の上もないデリケートなものを取扱つてゐるのだから、出来るだけ目先を細かく小さくして掛からないと不可ない。それで、僕がこの茶碗を見、どつかから響いて來る琴の音を聞き、床の間に活けた百合の香を嗅ぐ。そして「夏だな。」と思ふ。それから去年の夏のこと、故郷の裏山のこと、今年は海に行かうか、などと思ふ。こんなのは皆一種の經驗だ。』

『然し、今言つた中には色々の種類があつたやうだね、此所とか故郷とか、過去とか未來とか。』

『さうだ。時間と空間との双方の、凡ゆる範圍を有つてゐる。然し、さういふ雑多な經驗の内容について考へて見ると、二種類の根本的な差別のあるのが解かる。例へは向ふの壁だが、僕はその壁を黄色でザラ／＼してゐると思つてゐる。所がこの「黄色」は直接に經驗できるが、「ザラ／＼してゐる」か如何かは、直接には經驗できない。壁に手を觸れて見るといふ、他の經驗に頼らなくては解からないのだ。つまり、ザラ／＼した壁の表面の性質は、視覺に訴へる或る特定から示唆されて、間接に心に與へられた經驗なのだ。』

『すると、直接經驗と間接經驗と言つていゝ譯だね?』

『それで差支ない。然し、間接經驗は何等かの他の經驗が前以て行はれて居らなければ、その内容の示唆される譯はないのだから、本來から言つて最も單純な經驗ではない。だから人の原始的經驗は間接經驗ではない譯だ。假に全經驗が少しも間接的な内容を交へないで、悉く直接的な内容から形られてゐる場合を想像して、これに純粹經驗といふ名をつけるならば、原始的經驗はこの純粹經驗か又はそれに類するものでなければならぬ筈だ。そして元來、直接經驗はそれ自身で獨立に纏りがついてゐるものだから、従つて純粹經驗には事實の意識があるばかりだ。推察な

どといふものがないから、引いて誤といふものもなう。』

『何だか考へ難い六か敷いものだね。その純粹經驗といふものは、一寸どんな風に想像したらいいだらう?』

『さうだね……、夏の日に書寝なんかして、その醒め際に妙な境があるとは思はないかい? 目には何でもはつきり映るが、心はぼんやりして何の理窟もなく、赤いものは赤いもの、丸いものは丸いものだけでしか解からない。一寸あんな風なものと思へばよからう。然し、かういふ純粹經驗の世界は、ただ渾然として自分と自分以外の差別も、又は或るものと他のものとの差別もなく、有るものは不斷の變化ばかりだから、それを土臺にして知識が組立てられることは出来ないので。』

『でも凡ては純粹經驗、又は原始的經驗から分化して來なければならぬ筈だから、それでは如何して知識が成立したのか分らなくなるやうだ。』

『そこだよ、前にも言った通り、純粹經驗は理論を立てる爲の假定だ。然し人の原始的經驗は、大分それと似通つてゐるものに相違はないが、少しばかり違ふのだ。實際に於いては、精神は公

平無私に無差別に外界の印象を受け入れるものではなく、始から一定の傾向があつて取捨選擇をする。だから原始的經驗が縦令間接の内容を交へないものだとしても、決して鏡のやうに外界を公平に寫す純粹經驗ではないのだ。それと、精神には記憶があつて前後の經驗の内容を聯合するから、經驗の度び重なるにつれて、各々の内容は直接には與へられない多くの内容を示唆し、色々の關係を賦與され、かくして經驗は最早や渾沌たる變化の連続ではなくて、様々な事物の集りと見られるやうになる。そこで常識の世界が生れてくるのだ。』

『して見ると、常識といふものは大方は示唆から成り、間接内容に充滿してゐるといふわけだね? つまり當てにはならないと。』

『然しその當てにならないところ、示唆の多いところが大切なんだ。示唆によつて經驗の範圍を大きくし、示唆せられた内容を實現することによつて新しい關係が發展する。けれども悪い方面を見れば、示唆の錯綜は互に撞着を生ぜしめ、又事實に合はない示唆をも生ぜしめるから、常識には誤謬と矛盾とが絶えないことになる。だから凡ての學問は常識から出發するけれども、それには先づ示唆する内容の批判を忘れてはならない。つまり、學問によつて成し遂げられた事物の

見方の體系、即ち學問的世界觀は、常識的世界觀の中にある誤謬と矛盾とを除き去つたものと言つていい。』

『他人事ではない気がするが、其の常識的世界觀には主に怎んな誤謬と矛盾とがあるだらうか？』
『先づ、世界は物質と精神の對立から成るもので、その各々は互に獨立して、人の精神が消滅しても物質は依然として存在するといふ。抑々甚だ可怪しい話で、若しその物質界なるものがだね、全く吾々の經驗の外にあるものとすれば、如何して吾々がそれを知ることが出来るか？ 若し又、經驗の内にあるとすれば、如何して精神と獨立に對立し、精神の消滅した後にも存在を續けられるか？ 翻つて常識の所謂精神とは、抑々如何なるものであるか？ これを吾々の意識であるとすれば、意識は所謂物質界の知覺であつて始めて成立するもので、單獨に存在することの出来るものではないのか？』

『なる程、少し變だね。然し、さういふ問題は主に哲學の方でやるものではないかしらん？』

『勿論、哲學でもやる。やるどころでは無い、哲學上の根本要件たる認識論は實にこの問題を開明するのが役目だ。然し、それにしても心理學上で確立した事實が基礎になるのだから、心理學

の責任も甚だ重いと云はねはならない。』

『學界といふ言葉があるが、それだから何かの學問の一角が動搖すれば、忽ち學問界全體が動搖めき立つて、所謂「學界の問題」となる譯だな。』

『さういふ譯だ。……ところで、經驗といふ立場から見れば、物質界も精神界も何もない。一切は皆「經驗界」である。したが唯だ間接經驗によつて示唆された色々な關係を辿つて見るときは、吾々の經驗から獨立に存在する或るものを認めて、これを吾々に對立する客觀又は物質界と言ひ、吾々の經驗と共に流動變化する他の或るものを認めて、これを吾々の主觀又は精神界とするのだ。』

『經驗から獨立に存在する客觀があるといふなら、矢張り經驗と客觀との對立が出来ることになつて、一切が經驗だとは言へないやうに思へるが怎んなものだらう？』

『いや、經驗と獨立に言つたのは語弊があつたが、客觀は經驗に對立するものではなく、經驗の基礎である。例へば視覺があつても見られるものがなくては、視線の行つて打突かるものがない、見ることが成立しないと云つたやうなもので、客觀はそれに對して經驗が成立するもの、

短く言へば「経験されるもの」で、主観は従つて「経験するもの」だ。この二つが結んで経験を成立せしめてゐるのである。』

『今度は、その結び方が分らなくなつた。』

『例へば、今僕がこの茶碗を見てゐる。目を閉ぢる——茶碗の記憶があるが茶碗そのものは見えない。目を開く——また見える。この場合に、單に経験といふ點から言へば、目を閉ぢる前と後とは決して同じではない。だから僕が若し純粹経験の所有者であつたら、單に三段の別々な経験をしたに過ぎないのだ。然し僕の経験には現在の目の前のもの以上に及ぶ示唆があるから、目を閉ぢた時にも茶碗はあると信じ、再び目を開いた時には同じ茶碗を見ると信じ、縦令その間の三段の経験内容が同じでなくても、この茶碗の客觀的存在には關係がないと信ずる。そして何故に前後の経験に差があつたかといふと、それは精神の作用だといふのである。』

『すると、精神といふものは客觀界が同一である場合にも、経験に差別をつけるものなんだな？』
『さうだ。換言すれば、経験をば客觀に對立する主観に歸することが出来るならば、その経験は精神現象だ。従つて、同一な経験でも其の歸屬の仕方では物質現象にもなれば、また精神現象にもなる譯だ。仍で精神と物質との兩現象の差をば、かういふ歸屬の關係と見た上で、物理學は物質現象を研究する學であり、心理學は精神現象を研究する學であると言へる。』

『つまり、心理學では経験を以て主観に歸屬する精神現象として見るといふことになるが、個人について言へば怎んな現象だらうか？』

『言ふ迄もなく、意識現象だ。さうすると意識現象とは怎んなものか、換言すれば意識現象としての経験の特定は怎んなものか、といふ問題が起る。第一は意識現象の不斷性で、眠つて居らない限りは滾々として絶える間がない。第二はその轉變性で、各瞬間に變化してゐる。第三は、不同性だ、意識の中心を占めるものが明瞭に現れ、他は漠然としてゐる。そしてこの中心は意識の流動と共に絶えず推移する。第四は統一性で、意識はかく變化して濃淡があるが、常に統一を保つてゐる。』

『川のやうなものだね。』

『全く川だ。ジェームスはかういふ意識の性質に對して、「意識の流れ」といふ稱呼を與へてゐる。然し、この流れは川のやうに吾々の傍觀するに任せるものではなく、吾々の内的生命たる精神で

のもので、常に吾々と共に進退してゐるものなのだ。』

二 精神作用の特質

『大分はつきりして来たが、一口で言ふと心理学の所謂精神現象といふのは、経験の主観的方面の全部のことで、経験の主観的方面といふのは経験をする者の意識現象である。従つて精神現象は、つまるところ意識現象だと、かういふ譯だね？　すると、意識は精神の本質だとは言へないかしら？』

『それに違ひない。然しこの意識といふ奴は手に負へない厄介物だが、意識の存在を疑ふことは即ちその人の意識の存在を證明するのだから、この點で意識が存在するといふことは、證明を要しない自由の事柄である。』

『なるほどさうだね。然し、意識の活動には何か特徴があるだらう。』

『勿論、客觀的に見て他の自然現象と違ふ性質がある。その第一は注意だ。意識は絶えず流轉するが各刹那には統一があつて、明瞭なものが意識の中心に居つて、他の不明瞭な意識内容を統制するといふことを前に言つたが、かういふ作用を注意といふのだ。これは同時に於ける意識内容を統一する作用であるが、異時に於ける意識内容を統一する作用がある。それは記憶といふ精神作用の第二の特質だ。即ち、記憶によつて單純な視覚上の經驗などが、複雑な過去の經驗を心の中に呼び起して、極めて複雑な事情の代理を務める。だから經驗と經驗とは記憶で聯絡されるのだ。』

『して見ると、注意は精神の横斷面を統一する作用で、記憶は精神の縦斷面を統一する作用になる譯だね？』

『さう、さう。それから上の二つは意識そのものの活動の特質だが、もう一つ大事なのは意識と身體活動との關係で、意識の表出性といふのがそれだ。意識内容は何か故障さへなければ、常に自ら外に現はれたがり切つてゐる。例へば、言葉、叫聲、輿動、表情、血行と呼吸の變化、などが皆その現れである。これらがなくては、つまり注意と記憶だけで表出を伴はなければ、自分以外の他人には精神があるのやら無いのやら、一切分らないことになつてしまふのだ。』

三 精神作用の概観

『さうすると、人が怎んな意識内容を持つて居る時には、怎んな表出をするかといふことが大體

極つて居らなくちやたらん譯だ。同じ意識内容を持つて居つても、表出がてんぐばらくでは、結局譯が分らないことになつてしまふだらう。精神作用には、勿論何か方則があるだらうね？」

A 物心平行論

『無論、それはある。したが精神作用の概説に先つて、精神と身體の關係を大體説明して置かんと分り難い。第一に、精神、即ち意識現象は必ず身體に伴ふことだ。俗に靈魂は肉體とは別のもの、身體が死んでも存在を續けるなどといふ説があるが、心理學はこんな非科學的なものを相手にする譯にはゆかない。第二に、身體上の變化は意識上の變化を伴ふことだ。つまり精神現象が身體現象に變つたり、身體現象が精神現象に變じたりすることがなく、この二つは平行して起るといふのだ。だから、或る身體現象を内から見れば精神現象となり、精神現象は外から見れば身體現象だといふことになる。これが所謂「物心平行論」又は「精神物理的平行論」である。』

『普通から考へれば、精神は身體を動かす、身體の具合も精神を變ずるものやうに思はれる。』
『それが常識的な普通の考へだ。そして縦令物心平行論者でも、日常生活では皆さういふ見方——精神と身體の相互影響説、即ち「相制説」と言はれてゐるが、——に従つてゐる。然しそれ

で一向不都合はないので、平行論はただ事實の説明の爲に設けられた合理的な根本假定でつて、今日の科學の根本原理に従へば、これ以外に精神と身體との關係について考へやうながない、といふだけだ。』

B 感覺運動圈

『では、實際には必ずしも平行論に従ふ必要はない譯だね？』

『さういふ純理論では説明が立たないのだ。寧ろ、心理學的研究が進行しないのだ。今直接經驗に現れた事實を見るに、精神は矢張り身體作用に相關聯しながら活動してゐるからして、身體作用の方面から精神活動を考察することも不可能ではない。この立場から各々の簡単な精神作用を見れば、外部の刺激を受けて反應するといふことになる。例へば、菓子を見て、それを取つて食べる、といふが如き場合であるが、これは感覺から始まつて運動に終る一個の圈だから、感覺運動圈と名づけるのだ。』

『或る程。然しその始めと終りとの間に、どんな過程があるものやら……。』

『それは神經の生理解剖的組織を見なくては分らない。神經系統を根本作用の上から分類せば、

大體三種になる。第一は末梢感覺機官が刺激されて生じた興奮を中樞に傳へるもので、これは、求心性神経系統（感覺神経）である。第二は中樞の興奮を末梢の運動機官に傳へる遠心性神経系統（運動神経）で、第三は中樞と中樞との間に興奮を傳へる聯合性神経系統である。仍で最も簡単な神経傳播の過程はといふと、感官の刺激による末梢の興奮が、求心神経から眞つ直ぐに遠心神経に傳へられ、遠心神経から再び末梢に傳へられて運動機官の興奮となる順序である。』

『然し、その順序の中には聯合性神経が参加して居ないやうぢやないか？』

『未だだよ、今言つたやうな關係は極めて單純な過程で、日常生活に於いても殆んど稀だ。大抵の場合は、同一の求心神経は聯合の仕方を違へて多くの遠心神経に聯絡し、又同一の遠心神経も多くの求心神経と聯絡してゐる。だから催眠術にでもかゝつて居る場合の外は、爲やうか爲まいかとか、あれを爲やうかこれを爲やうかとか、いろ／＼の面倒が起るのだ。然し、幾ら中樞間の聯絡が多様になつても、根本の形式は唯だ一つしかない。即ち、感官—中樞—筋肉の一本道だ。』でも、刺激を受けても反應しない場合もありさうなものだ。……自發運動なんかも外部からの刺激によらない反應と言ふべきものではないか知らん？』

『それは斯うだ。感覺があつて運動のないのは、感覺の興奮が中樞の複雑な聯合關係の中に紛れ込んでしまつて、他の反對作用の爲に一時運動を禁されてゐるが爲である。また自發運動なものは、實は身體の内部にある末梢刺激が原因だといふことになつてゐる』

『すると末梢感覺を刺激されさへすれば、末はみな運動となつて現はれることになるのか？』
『さうとも。但し、一つ注意の要ることがある。吾々の周圍の外界は雑多な刺激の集りだ。それを一々取上げて居つた日には、所謂身體が堪らないから、刺激に對しても前に言つた意識と注意との關係が出来てゐる。つまり、注意された刺激は意識の中心を占めて明瞭な知覺となり、他は夫れ夫れの程度で看過されるのだ。然し刺激を知覺したばかりで、何の意念も伴はずに運動する觀念運動——「何の氣なしに……。」といふ奴だ——を始めとして、何日も何ヶ月もの熟慮の末に斷行される重大な行爲に到るまで、分析して見れば皆この感覺運動圏内の堂々めぐりに過ぎないのだ。……感覺知覺から起つて運動を終點とする行爲は、實はそれを以て完く終結するものではない運動の結果は新しい感覺知覺となり、再び新しい運動を生ぜしめる。さういふ風にして何處までも連鎖を續けてゆく。』

『なる程ね。それでこそ短い一日と永い一生とかいふ言葉が、ほんとうに生きて来るやうな気がするね』

C 循環活動

『以上は單に外部から見た大體の觀察で、感覺刺激から運動、運動の結果の刺激から又運動といふ風に刺激と運動との連続であつて、「圈」即ち循環ではない。然し、その場合の意識情態の内部に立入つて見れば、正しく感覺運動圈をなし、一の循環をなしてゐる。』

『さう、さう。圈といふ意味を忘れて居つたつけ。』

『刺激によつて現れた意識情態は常に動機(A)となる。動機は運動(B)を起す。運動によつて成る變化(C)が生ずる。そして動機は、運動が起つて變化が生ずるまで頭張つてゐて、變化が完了すると共に消え失せる。然し、その完結した活動がまた新しい動機となつて、新規の循環が始まる、といふ風だ。つまり、一寸その鉛筆を借してくれ給へ。…… $\{A+B+D\}+B+C+D+C\dots\dots\{A+B+D\}+B+C\dots\dots$ といふ關係で、この場合に括弧にくくられてゐるものを第二のA、第三のAと見做すのだ。』

『動機が二重になつたり、途中で消えたりする場合はないのかしら?』

『それはある。二重の場合には、甲の循環活動の中に乙の循環活動が含まれ、乙が完結せぬ中は甲は完結しないので、即ち、 $A(A+B+D)+B+C$ といふ關係になる。それから途中で消える場合は、第一の動機も第二の動機も完結せぬ中に、突然に第三の強大な動機が現れて、その完結の満足が第一第二の動機の完結しない不満足を壓倒してしまふのだ。序に式で出せば、 $\{A(A+B+D)+B+C\}+B+C$ といふことになる。』

『何か適切な例がないかね?』

『面倒だね。第一式は論理的な分り切つた式だから例解にも及ぶまい。第二式は、例へばA「社會事業をしたい」(A)「その資金が欲しい」+B「勤勞」+C「貯金が出来た」+B「設備をする」+C「社會事業」といふ關係だ。第三式は、A「社會事業をしたい」(A)「その資金が欲しい」……A「何しろ財産が欲しい」+B「けちくする」+C「守錢奴」といふ關係だ。』

『ハハ……。面白い。面白い。後のは手段の爲に目的が没却された形だ。』

D 意識の分析

『まあ、聞き給へ。吾々の實際的な精神作用は、悉く今言つた循環活動の根本形式に這入るもの

だ。そこでそれを精神活動の模範形式と見て、意識の内容を分析して見やう。……循環活動には、動機と、運動と、動機の満足とがあることを言つたね。仍で、かういふ風に動機が一定の経過を通じて満足されるまでの経緯をへ意志過程又は簡単に意志と呼ぶのだ。』

『すると、「意志」といふのは兎に角一應纏りのついた、一と句切りの精神過程であつて、つまり精神活動の單位の譯だね?』

『左様。それで今度は、その一纏りの中の要素の問題だ。先づ動機とは怎んなものか? 例へばこの「差煙草入から敷島一本を取る。」といふことは、煙草を吸ふといふことの動機であるが、その中には、その中には「巻煙草入」とか「敷島」とか兎に角觀念又は表象が含まれてゐる。然しこの觀念だけでは動機とはならないのだ。それが動機となる爲には其の行爲をしないと不満足を感じる意識状態が必要だ。これは觀念とは頗る性質を異にしたもので、吾々はそれを感情と呼ぶ。』

『して見れば、動機の中には觀念と感情とが含まれて居なくてはならない譯だね』
『さうだ、所でこの觀念であるが、これは中々分析に骨が折れるけれども、結局は感^ん覚^みたいな

性、不衛生

ものになるのであつた(た)感覺(感覺されるもの)の性質によるものあるから、感覺する人の氣分や嗜好などで動かされない。即ち、客観的だ。』

『でも少し變だね。先刻は……』

『分つてる。分つてる。まあ待ち給へ。……感情はこれと反對で、その氣分や嗜好によつて動搖するから、人に歸すべきもので、即ち主観的だ。そんな譯で、感覺と感情とは對立する性質を持つてゐる。所で前に經驗の説明の時に、物理現象と意識現象は見方の相違で、主観に獨立して存在するものとして見た經驗は物質現象となり、主體に屬するものとして見た經驗は意識現象となると言つた。それを此所に應用して、意識界をば更に感覺(表象)と感情の二種に分ける。つまり、

經驗	物理現象(客)	感覺(客)
	意識現象(主)	感情(主)

といふ具合になるのだ』

『すると此の感覺つて奴は、餘程妙な混合子だね。物質界と精神界との境にゐる。して見ると、

の自然現象系ト
之を感^ん覚^み現象ト
物^の理^の系ト

X

『感覺界は物理学の範圍になるか？』

『所が大違ひだ。物理学の世界は感覺を抽象した世界で、色も香もない理窟の世界だが、感覺そのものの世界は、大威張りで精神の世界の中に持場を保つことが出来るのだ。……大分詳しく話したから、大體の理窟は分つたらう。細かい説明に入るのだ。やれく、折角手に取つた煙草だから、こゝらで一服やるとしやうか。』

二、精神の要素と方則

『精神は有機的な統一作用で、全體としての働き、又全體としてのみ實在するといふ話だつたが。さうとすると少くも要素、といふのは怎んなものかね？』

『尤もの仰せだが、全體としての活動を研究する爲には、必ず分析が必要で、分析は全體を理解する手段なんだ。』

『それにしても精神は固定したものではなくて過程だから、一遍現れたものは二度と再び現れず、消え失せるといふんだから、さういふものを如何して分析する？』

『さう、怒るなよ、捨てる神あれば助ける神ありで、この場合「刺激と注意」が反り忠をする輕浮者だ。例へば、或る刺激を與へてイロハといふ注意の出て来る意識過程を拵へる。また別々の刺激でイニホ、イヘト等の意識過程を拵へて比較して見、皆イといふ共迎點のあることを發見せば、イをその過程から抽象することが出来やうといふものだ。して其のイが、更に分析されやうがないとなれば、即ち過程の要素だといふ。』

甲 抽象的要素

『特に抽象的といふものは、何か意味があつてのことか？』

『それは、さういふ要素は純粹にそればかりを現はすことが出来ずに、必ず複合的な内容の中から——例へば視覺と聽覺との結合されたものから視覺だけといふ風に抽象されねばならないからだ。この要素には前言つたやうに、感覺と感情とが算へられるが、これは分析によつて一切の附加物を除き去つた純粹單一なもので普通いふものとは違ふから、嚴密に言へば純粹感覺及び單一感情とせねばならない。それでは……』

『一寸待つてくれ。先刻、感覺運動圈が精神活動の單位だと言つたが、今は感覺と感情が要素だ』

となつた。それは如何いふ關係になつてゐるのか……？」

『質問の要領がいゝ。感心した。……ところで、感覺運動圈は精神活動に於ける機能上の假定的單位だし、感覺及び感情は現實的精神に於ける分析上の要素だ。つまり二つは全く違つた見地から立てられた單位で、抽象的要素から見れば感覺運動圈は單位でなくて複合體であり、感覺運動圈から見れば抽象的要素は單位ではなくて單位——感覺運動圈自身の——の抽象的斷片であるのだ。これで熟く解つたらう。』

一 感覺(純粹感覺)

『解つた。感覺に移つてよろしい！』

『身體の内的及び外的の刺激によつて生ずる、最も簡單な精神的現象は感覺だ。そこで順序として刺激から始めねばならない。で、感覺を生ぜしめる物理的要件は、感覺刺激であるが、これは身體内に起る變化と外界に起る作用とに分れて、前者を内部感覺刺激、後者を外部感覺刺激といふ。』

『身體内に起る變化をいふのは、どんな變化でどんな刺激を與へるものだらう？』

『それは身體を構成してゐる諸機關の變化だ。例へば、眼の機關内にある液體の壓力に變化が起れば、網膜に影響が及んで視覺が生ずるといふ類だ。さういふ内部機關の刺激は、通常は極めて微弱なものであるが、然し氣分だとか機嫌などいふ精神状態は多く其れによつて支配される。して此の内部感覺刺激は、大腦その他に起る中樞感覺刺激と、營養機關その他の身體を保存するに必要な機關に起る非中樞感覺刺激とに分れる。』

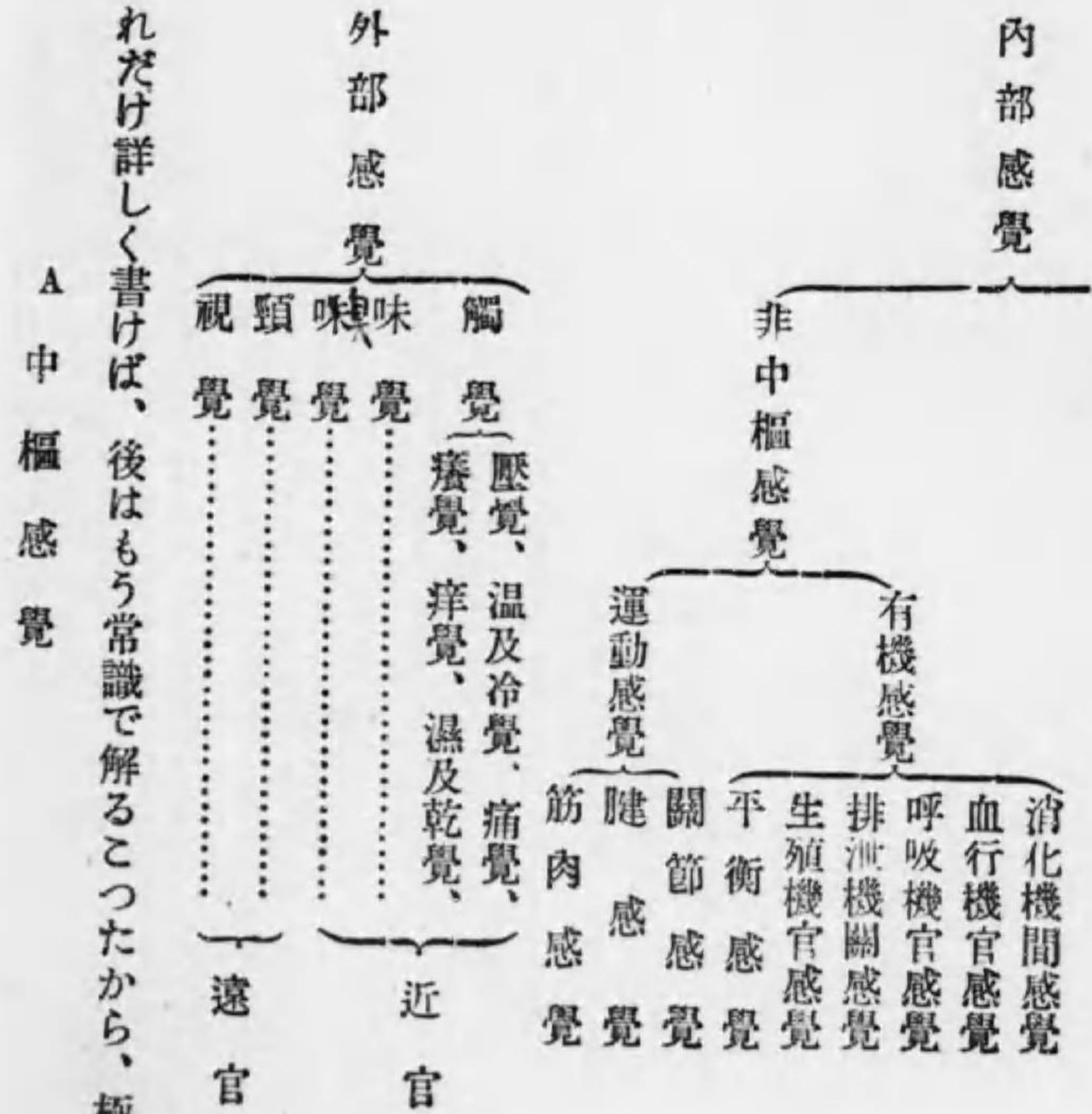
『外部からののは怎んなものだね？』

『外部感覺刺激は一般刺激と特殊刺激とに分れ、一般刺激といふのは怎んな感覺機關にも感ぜられる刺激で、(一)機械的打撃、(二)電流刺激、(三)溫度刺激、(四)化學的物質刺激に分れ、特殊刺激は耳に對する音、目に對する光、鼻に對する匂のやうなものを指すのだ。耳で光は見えないし、目で匂ひは嗅げないから、それで特殊だ。』

『成る程。そして其の刺激に應じて夫れ夫れの感覺の種類があるといふわけ？』

『だから感覺の分類は、刺激の分類に従ふのが一番に手つ取り早い。まあ、かうだ、』

中樞感覺



『これだけ詳しく書けば、後はもう常識で解ることだから、極く大體の話に止めよう。』

A 中樞感覚

『これは普通、大脳の感覚中樞に起る刺激の感覚で、病的に強くなれば幻像や幻音の原因となる奴だ。例へば睡眠中に血液不良の現象が起り、この不良な血液が脳皮質に興奮的影響を及ぼすといふと、夢を見るといふことが起る。病的に血液が不良になつて、脳皮質の感覚中樞が著しく、興奮させられれば、感覚を生じ観念を生じ更に幻覚を生ずる……大丈夫かい、「鬱毒性痴呆症」なんて厭だぜ。』

B 有機感覚

『大丈夫だよ。それでは。有機感覚を説明してくれ。』
『危いを見て逃げたな……これは主として、生活機能に属する感覚で、身體の健否を示すものとして生存上甚だ大切だが、實驗が困難だから未だよく分つてゐない。消化機官の感覚は、空腹満腹、嘔、醫嘔、等で例へば渴の感覚は最初は喉に感じられ、酷くなると胃の腑の奥まで擴がつてゆくといふ類だ。呼吸機官の感覚は普通呼吸筋肉の運動感覚があるばかりだが、過激に運動した時など「息の詰まるやうな」感覚がある。あれだ。むん／＼した部屋から、外に出て「ホットした」感覚なども此の種類だ。血行機官の感覚も普通は分らないが、何かの場合には心臟に特殊の感覚

が起る。「胸が早鐘を撞くやうだ。」といふのは此の場合だ。排泄機官の感覚には排泄前、排泄中、排泄後に各別々の感覚がある。涙の出る時なんかもよく分る。生殖機官の感覚は外部刺激の部のやうに見へるが、普通なら其の外に複雑な觀念と内部刺激(内部泌)と共に起る。して其の感覚の経過は甚だよく排泄機官の感覚の経過に似てゐる。平衡感覚は耳の奥の主として三半規管に感ずる感覚で、身體の平衡を司るものだが、學者によつては反射的に運動を生ぜしめるばかりで感覚を與へるものではないといふが、實驗の結果によれば漠然たる觸覺に類する一種の感覚があるといふことだ。』

『有機感覚はそれでお終ひだ。』

『いや、まだ有る。それは全身的に感ずる感覚で、「疲勞の感」や「元氣横溢の感」などだが、何處に感ずるとハッキリは言へないが確かに有ることは有る。』

C 運動感覚

『これは最う、説明までもないやうだね。』

D 五官感覚

『有難い。それでは外部感覚に移らう。この外部感覚は昔は五官感覚と言つたものだが、餘り常識的な分け方だから今は用ひられない。五官といふのは觸覺、味覺、嗅覺、聽覺、視覺の各感覚間だ。』

『それが今は如何いふ風に分けられてゐるといふのか?』

『問題は觸覺にある。觸覺と言つたのは昔のこと、今は皮膚感覚と呼ばれてゐるが皮膚には觸覺、即ち壓覺の外に、前に書いて見せた色々な感覚があるのだ。』

『ではそれを順に説明して呉れ。』

『第一、皮膚には性質を異にする四種の感覺器官があつて、壓點、冷點、温點、痛點がこれだ。それ等は芥子粒よりもまだ小さい點で、色々の割合でマゼコゼになつて皮膚の全面に散らばつてゐる。……仍で、壓覺——狭義の觸覺——は押す力又は吸ふ力を感ずる感覚だが、その壓點は指の先などに一番多く集つてゐて、背中などには少い。これは凡て毛のある所には何處にもあつて、約一耗瓦の壓で容易に感應するといふのだ。痛覺は言ふ迄もなく「痛い。」といふ感覚で、先の尖つたもので突いて見れば殆んど皮膚の到る所にこの感覚を呼び起すことが出来る。のみなら

す、さういふ機械的刺激の外に、電気、熱、化學的刺激等によつても起るし、内部刺激例へば皮膚の炎症によつて生ずる化學的物質——毒素——によつても起る。』

『つまり壓點や温點冷點などの刺激が強くなれば痛覺が生ずるのだな。すると、痛點には二重の感覺があるのかね？』

『さうではない。壓點その他の點の刺激が強くなれば、自然に周圍の痛點を刺激するのだ。これは感覺職官中の一番優勢な種類で、どの點でも刺激が強くなりさへすれば、みな此の痛覺に壓倒されてしまふ。それに、痛點が極めて軽く興奮すると痒覺——かゆい感じ——が起る。』

『なる程。……擦つたい感じもそれに似てるやうだが……？』

『あれは又少し違ふ。あれは壓點の微かな興奮にいろんな感覺が加はつて起る複雑な感覺で、痒覺と言ふのだ。それから温覺と冷覺だが、これは相對的感覚で、皮膚の温度を真中にして種々な程度に感ずる。そして温點の方は冷點よりも数が少い。』

『その真中の温度は普通どの位のものかしら？』

『人にもよれば時にもよるが、大抵は攝氏二十七八度の邊で、これを生理的零度といふのだ。以

上の外に混合子が二人ゐる。その一人は乾覺で、これは觸覺と運動感覺との結合であり、濕覺は壓覺と温覺との結合だ。』

『それで皮膚感覺の方は濟んだか？』

『で、味覺に移るが、これは液體によつて起る化學的感覚で、普通甘、鹹、酸、苦の四種の味に分れる。然し飲食物の味は味覺が獨立で感ずるものではなく、温、冷、壓、嗅などの感覺と協同して働く。』

『例へば怎んな風にかね？』

『米飯の美味いとか不味いとかは、舌の上の味覺の違ひではなく、觸覺——つまり舌ざはりだ——や、咀嚼する際の抵抗感覺や、温覺等の違ひだ。それから松茸の風味は嗅覺が主で、山椒の味は舌の痛覺が主だといふ風である。……それから嗅覺これは、氣體によつて起る化學的感覚で種類は明確に分ち難い。して嗅覺を感ずる部分は、鼻の奥の奥の折れ曲つた部分の嗅領といふ所にあるから、普通の呼吸では空氣は嗅領を通らずに、眞直に氣管に突き抜けてしまふ。だから十分に匂を嗅ぐ爲には、吸氣を強く短かく吸ひ込む必要がある。』

『クン／＼嗅んだりフカ／＼嗅んだりする奴だな？』

『さう、さう。——以上で皮膚感覚、味覚、嗅覺の三つが済んだ。残るは聽覺と視覺ばかりなりだが、一寸こゝで前三者と後二者とを比較して見るに、大凡三個の點に於いて異つてゐるから、前者を劣等感覺、後者を高等感覺といふ。』

(一)前者は近官、後者は純然たる遠官。

(二)前者は感覺と刺激との間に整然たる關係を有せず、後者はこれを有する。従つて前者は客觀表象の素材たり得ず、後者は素材たり得る。

(三)前者に伴ふ感情は、常に生活の直接必要に束縛されて快不快の範圍を出ない。後者に伴ふ感情は快不快以上に美醜の感情を加へる。

仍で先づ聽覺から説明しやう』

『その前に、近官遠官といふのは……？』

『皮膚感覚、味覺、嗅覺は、刺激が身體の或る部分に觸れなくては感じが起らないといふことだ尤も、嗅覺は幾分か遠官性を有してゐるが、それでも聽覺や視覺のやうに完全にはゆかない。氣

體でも何でも、兎にかく鼻の中の皮膚に言れなくては感じないのだから……』

『さうか、さうか、解つた。』

『で、聽覺の機官は耳で、これを刺激するものは外圍の空氣の振動だ。少し詳しく言へば、外來の音波は先づ外聽道から入つて鼓膜を打ち、鼓膜はその振動を小聽骨に傳へ、更に卵圍窓を通して内耳内の液體に傳はり、そこに分布してゐる聽神經を刺激する、といふ關係になつてゐる。つまり鼓膜は無數の弦——一萬八千乃至二萬あるといふ話だ——から成る弦樂器と見らるべきもので、音波の中の高い音は狭い弦、低い音は廣い弦に共鳴する。そして此の共鳴が聽神經を刺激して聽覺を生ずる。』

『音には高い低いばかりのものかしら？』

『さや、三種類ある。一は空氣の振動波が規則正しい場合——樂器の音は皆これだが——で、これを調音といふ。それが不規則になれば騒音——波の音など、自然界の音は大抵騒音だ——である。外に、純音といふのがあるが、これは要り調音の一種であつて、多數の集合音から成る樂器の調音に適當の裝置を施して、一切の附屬音を排して唯一つの音にしたものである。音の研究は

凡てこれを基礎にしてやらねばならない。』

『音色なんていふのは——？』

『あれは種類でなく性質だ。音の性質も三つに分れてゐて、調子——即ち高低は——一定時間の振動数の多少によつて定まり、強弱は音波振動の幅——即ち音幅——の長短によつて定まり、音色は基音に伴ふ倍音の數と性質とによつて定まる。』

『成る程ね。然し、詰らないやうなことを研究してるもんだね。』

『いや、決して詰らなくはないんだ。美術や文學は殆んど皆この聽覺と視覺とが材料だからねえ。學問は土臺から築いて行かなくては物にならない。……仍で視覺だが、視覺の機官は眼であることは言ふ迄もない。眼の構造は寫眞の暗箱に似てゐるが、一寸口では説明し難いし興味もなからう。だからそれは抜きにして、視覺の性質から話さう。これは大別して二つになり、光の強弱によつて生ずる感覺を光覺（又は無色覺）といふ。つまり光の最も強いものを白とし、全くないものを黒とし、其の間の無數の灰色を連ねて一直線をなす系續だ。もう一つは色覺で、例の虹の七色だ。即ち、赤、橙、黄、綠、青、藍、紫で、これに牡丹色を加へると再び赤に接近して循環する。』

る。』

『原色といふのがあるが、あれは何か標準があるだらう？』

『所が無いのだ。この色の輪の中の、どの色でも兩隣の色を半々に交せれば出来る。だから八つの中、どれか二つ以上を原色として定めれば、他は其の種々な混合によつて出来て来る譯だ。然し普通は更宜上赤、青、黄の三色或は赤綠青の三色を原色としては居るがね。……附け加へて説明すべきことは、色盲と殘像だ。』

『そいつは問題の種だテ。』

『色盲といふのは、光覺は健全だが色覺の一部又は全部辨別し得ない場合だ。色覺の全部を缺失するもの、即ち全色盲は明暗だけしか見えない——つまり世の中が寫眞のやうな具合だ——が、さういふ例は殆んど無いと言つていゝ。部分色盲の中で最も多いのは赤色盲、及び綠色盲である。つまり赤や綠が鼠色に映るのだから、赤や綠の交つた間色もそれ／＼調子が違つて来る譯だ。して色盲は女よりも男に多く、女の十倍以上に上るといふ。……それから殘像といふのは、例へば火を振り廻すと火の輪になつて見えるやうに、刺激の無くなつた後まで續いて見える感覺だ。』

『さう、さう。何でも活動寫眞が其の理を應用したものだといふことを聞いたつけ。』

E 感覚と刺激との關係

『以上で感覚の説明は終つたから、さつと感覚と刺激との關係を述べて置かう。この關係は強度と形質との二つに分けられる。先づ強度の關係から始めると、第一に覺閾といふもので、餘り弱すぎては感じない。この感覚を生ぜしめ得る最低限度の強さを覺閾といふのだ。それから漸次に刺激を増して行けば感覚の強さを増すが、然し無限に増さるものではない。一定の限度を越せば感覚の強さは増さない。その最高限度を覺頂といふ。但し光に對する覺頂を測らうとすれば網膜を破り、音響に對する覺頂を測らうとすれば鼓膜を破つてしまふ。然し覺頂はあるには有るので、甘さなどは一定度を越せば、幾ら甘さを強くしても甘いといふ感じは増さない。』

『つまり覺頂は天井で覺閾が床だ。吾々の感覚はその部屋の中に生活するといふ譯だ？』

『さう、さう。それからウーベルの法則といふのがあるが、これは百燭光に一燭光増せば光の強くなつたことが分るが、二百燭光に對しては二燭光増さなくては強くなつたとは感じない。そ

こに刺激の増減變化を辨別し得る最小限度の辨別閾（又は差閾）があつて、これが刺激と共に大きくなり小さくなるといふのである。もう一つフエツヒネルの法則といふのがある。これは刺激が幾何級數的に増加する時に、感覺は算術級數的に増加するといふのである。例へば、二匁、四匁、八匁、十六匁の重さは、二、四、六、八の割合で感じられるといふのである。それから……』

『形質の關係だらう。』

『その一は感官順應の分化である。いま生物の感覚の發展の跡を見るに、最初は全面感覺——皮膚感覺——が生じ、次に多面感覺——味嗅覺——が現れ、最後に一面感覺——聽視覺——が出來たものである。其の理由は、外部刺激の變化の爲に感官に分化作用が起り、益々細かくなるに及んで、場所によつて刺激に對する生理的興奮が異なることになり、遂に感覺到異なる種類が生ずるに至つたものだ。』

『すると元來は各感官の感覺能力が定まつて居つた譯ではなく、後の事情によつて二義的に分業式になつたといふのだね？』

『さうとも。で刺激形質の差になるが。前に外部の物理的刺激を四種に分けたけれども、それは皆運動現象に属する。機械的打撃は勿論のはなし、電流刺激は電気運動現象、熱はエーテルの波動、化学的刺激は化学的物質内の原子運動現象だ。運動には皆形がある。』

『形といふと……？』

『形つたつて三角や四角といふ譯ではない。主として振動数である。一秒に十回以上五萬回の振動は音となつて聞え、それ以上は何とも感ぜられなくなり、三十萬億回になつてから熱として感ぜられて来る。それ以上はまた分らなくなつて四百五十萬億回に到つて今度は暗青色の色覺となつて現はれるといふ按配だ。但し味や嗅の刺激は今までの所では振動数にして現せない。かういふ風に、感覺の性質の差は感官の性質の差ではなく、寧ろ刺激の往質の差に基く。つまり感覺の性質の差は感官中に起る生理的作用に規定されて生じ、其の生理的刺激的差は物理的刺激と感官との順應によつて起るのである。然しこの物理的刺激とを幾ら精密に研究しても、それを以て感覺の現象を説明することが出来ない。即ち刺激と感覺とは全く刺激なのである。』

『それが詰り、先刻の物心平行論でなくてはならない所だらう。』

『さう、さう。感心によく覚えてゐるね。全く、此の平行の原理で説明するより外に道はないのだ。然し、さういふと甚だ心許ないやうに見へるが、吾々が外界に關する知識を得るのは實にこの原理によることで、例へば二つのものの輕重の差は感覺の差であるが、それを利用して其のもの輕重を知ることが出来る。即ち感覺を基礎として外界の事物の價値を定め、或は物理界を推論し得るのも、皆この原理によるのである。』

二 感情 (單一感情)

『單一感情といふのは、分析によつて一切の附加物を除き去つて考へた、純粹單一なものであるといふことであつたな？』

『さうだ。然しこの感情といふ言葉は、常識では誠に漠然たる意味を有つてゐる言葉だが、兎に角、感情は常に精神の主觀的方面を指すといふことだけは、何所へ行つても通用する。然し此の場合に問題となるのは、「主觀的」といふ言葉だ。先刻、主觀的といふことを主觀に歸屬せしむべき性質として置いたが、この主觀といふのは要するに認識の主體、即ち認識者に外ならないから、主觀的とは認識者に歸すべき性質といふことになる。』

或は、主觀的とは、認識者に歸すべき性質といふことになる。

『すると更に其の認識主體としての主観を認識するものがなくてはならない。主観を認識するには別の認識主體を要することになつて、結局際限がなくなるやうだが……?』

『全くさうだ。然し認識主體としての主観は、認識の對象ではないといふ消極的内容しか持たない限界概念ではあるから、循環ほしない代りに感情は歸屬すべき對象を持たない意識内容になつて来る。……そんな馬鹿な話はないのだが、未だ研究が屈いて居らないのだ。だから感情の領分は次第に蠶食されて行つて、極端な論者は感情をば全部感覺に合併しやうとする位だ。然しそれとても未だ假説の域を脱して居らない。』

『結局、すると感情といふものは分らんものだといふのか?』

『分らない。但し、「如何いふ働き」があるといふことは分るが、『怎んなもの』だかが分らないと言ふのだ。』

A 單一感情の種類

『して其の働きには怎んな種類があるだらう?』

『多くの心理學者は、感情の種類を快不快の二つにして、他は皆感覺としてゐる。成るほど、快

と不快とは明白に主観的性質を示すものではあるが、然しこれ丈では如何しても不都合な場合がある。それを救ふものはヴントの「感情三方向説」だ。』

『ハハア。どんな方向だらうかねえ?』

『ヴントによれば、感情の性質は無限に多いが、就中最も根本的な三對の主要方向が認められ、それは快と不快、緊張と弛緩、興奮と沈靜である。だが此の六つの感情は、各々一定の性質を表はすものではなくて、各々の中にも色々な程度が包まれてゐる。さうしてこの三對は、各々正反對な性質を有して、感情のない區域——中性状態——を距てて相對してゐるといふのだ。』

『一寸、簡単な例を聞かしてくれ。』

『例へばだ。皮膚感覺、嗅覺、味覺等は快不快の感情の方向をとり、視覺、聽覺には興奮沈靜の方向が主として現れ、或る刺激の出現に注意を向けると緊張と弛緩とが交々現れる。然しそれ等は大抵混合して現れて来る。……だから更に例へばだ。音樂を聞く場合に、リズムをなす折節は緊張と弛緩とを生ぜしめるが、その速度の具合が快と不快とを起し、高い音は陽氣な輕快な感情を起し、低い音は森嚴な眞面目な感情を起すのであるが、それは興奮と沈靜との感情に快の加は

つたものである、といふやうな譯だ。』

B 單一感情の特質

『なる程、尤もな話だ。……で、特質であるが、これは主観性といふことではなかつたのか？』
『勿論、それには違ひない。即ち第一は主観性だ。然しそれと聯關して、他にも二三ある。第二は明瞭性の缺乏といふことで、これは感情が直接に注意の對象とならないが故である。實際には可怪しな奴で、まあ遣つて見給へ。感情は注意されると一層明瞭になるが、感情ばかりは注意を向けると消えてしまふか、或は別のものに變つてしまふ。』

『それでは感情に關する觀察も研究も、一切できない譯ではないのか？』

『ところが出来る。それは感情そのものに注意せずに、その感情を伴ふ感覺又は表象に注意すればよい、即ち、感情も間接的注意の對象にはなるのだ。』

『第三は？』

『感情の對立性だ。硬軟、輕重等の感覺の性質の間には、差異はあつても對立はない。然るに快と不快とは差異ではなくて明かに對立だ。ヴントの言葉によれば、「感情の性質は最大對立によつ

て限られ、感覺の性質は最大差異によつて限られてゐる。」のだ。』

『第四は？』

『感情の協同表出性で、常に感覺又は表象等の客觀的要素と相伴うて現れるのが常である。そして各々の感覺には略一定した感情價といふものがあつて、大體はヴントの言つたやうに、感覺の強度に伴ふ感情の變化は快不快の方向と關係し、性質——色や音等——の變化に伴ふ感情は興奮と沈靜との方向と關係し、感覺過程の時間的經過は緊張と弛緩との方向と關係する。然し同一感覺に久しく接すると、快も不快も失はれて中性になつてしまふ。』

『つまり「慣れ」だな。』

『さう、さう。學問的に言ふと感情の鈍摩といふのだ。次は

C 單一感情の結合

であるが、感情は單純な感覺に伴つて起るよりも、感覺の結合に對して顯著に現はれるのであるが、さういふ場合にも感情は感覺と異つて、複雑な客觀的内容に對しても單純な感情が生ずる。だから客觀的内容が複雑な諸要素から成る時は、それに對して生ずる感情は、諸要素に伴ふ感情

と、全體に伴ふ感情との二種類から出来上る譯で、前者を部分感情、後者を全體感情といふ。』

『けれども部分感情が集まればこそ全體感情になるので、別々なものではないのか？』

『勿論、それは理論上の分け方で、部分感情は常に全體感情の中に溶けて個別的存在を示さないから、寧ろ反對に、在るものは全體感情で部分感情といふものはないと言つた方が早い位だ。かういふ風に種々の感情が溶け合つて、一の統一的性質をもつのは感情の特色だ。』

『順序を狂はしてはならない。今は感情の結合の話だよ。』

『その結合をなさしむるものが感情の融合性と移轉性だ。……感情の融合といふのは部分感情が合して全體感情を成すが如き場合であつて、茲で特に注意すべきことは全體感情は決して單なる部分感情の和ではないといふことだ。例へば、夏野の感じ、お祭氣分、卒業式の氣持、野暮な感じ、などは凡ゆる部分感情を合せても出ては來ないのだ。』

『では感情の移轉性とは？』

『これは或る意識内容に伴ふ感情が、他のものに結びつけられることだ。例へば、何かの事で起つた強い感情が、同時又は引續いて起つて來る事柄にまで影響することである。「朝に冷水摩擦

しないと一日氣分が悪いなんていふのは其れだ。』

『抹香の匂と悲しくなる、などといふのも其の類かね？』

『それは違ふ。今言つたのは感情の放散であるが、君の言ふのは感情の推移だ。つまり屢々同時に結びついて經驗した意識内容の一が、結びついた時の感情を自己固有の感情のやうに同伴するのである。』

D 感情の本質

『これは解らんと言つたではないか？』

『いや、分らないにした所で科學の面目上、涼しい顔して「解らん。」では濟まされない。出来るだけは打突からなくてはならないのだ。仍で、第一注意を要するのは、事實の問題と説明の問題を混同してはならないことだ。先づ意識に與へられた性質から見て、感情は何であるかの問題に對しては四通りの答がある。』

第一は感情を感覺の一偏性とするものだ。然しこれは色々都合が出来て來る見方で、その一つの言分は、感情をなくしても感覺はなくてはならないから、感情を以て感覺の屬性とすること

は出来ないといふのだ。

第二は感情を有機感覚の融合であるとするものだが、これは前にも言つたやうに感情を捉へやうとして共に伴ふ有機感覚に注意すれば、肝心の感情は逃げて有機感覚だけ残るから、意識の事實を説くものとしては獨斷誤謬である。(ジェームス・ランゲ説)

第三は感情を特殊の感覚とするので、不快は痛覺、快は痒い感覺であるといふ感情感覺説であるが餘りに奇抜に過ぎて受入り難い説で。(ストムプの感情感覺説)

第四は感情を感覺とは獨立した要素と見る説で、最も有力な説である。さあ、そこで怎んな要素かと言はれると、もう解らない。』

『なあんだ、幽霊の正體見たりの方だね。』

『まあ、氣を長くしてもう百年待ち給へ。……仍で説明の問題になる、が感情は如何なる神經過程によつて發生するかといふと、問題が分れて二つになる

第一は感情の生理的機制如何で、それにも神經中樞の作用から生ずるとするものと、末梢機官の變化から生ずるものと二通りあるが、兩方とも反對者の攻撃に堪へないものであつて、要する

に感情の生理的機制は不明であるといふ外はない。

第二は感情の生物學的意義如何で、目的論的説明であるから前者と直接關係はないが、前者の缺陷を補ふものとして重要である。但し、この場合の感情とは快不快の方向に限る。つまり不快は吾々の幸不幸を示すもので、好むものが有益であつて嫌ふものが有害だからこそ生物は生き存へるのだといふのである。勿論、例外があるが其れは進化の道程に於ける偶然であると言ふのだ。』

乙 基本法則

『基本法則といふのは注意といふ意識の横断面と、記憶といふ意識の縦断面とのことであつたな?』

『さうだ。今まで説明して來た抽象的構成要素は、分析によつて得た意識の構成單位ではあるけれども、物理學の原子や化學の元素のやうなものではないから、その性質を知ることが直ちに精神活動の方法を知ることにはならない。だから具體的な精神作用を理解する爲には、構成要素の性質のみならず、この要素を内容として活動する意識の活動法則を知らねばならない。』

一 注意

『單簡、單簡』

『注意とは或る意識内容が明瞭に現れ、他の意識内容が閑却される精神過程である。つまり注意するといふのは、明瞭に意識するといふことだ。(注意の意義)そして注意された内容とされない内容との関係は、「繪さがし」の場合によく解かる。例へば髑髏だとばかり思つて居たものが、美人の群像だと分ると、全く俄然として髑髏が美人の群像に變り、徐々に解るといつたやうなものではない。一が俄然として明瞭になれば、他は俄然として不明瞭になるから、注意の状態に於いては意識は不明と不明瞭の二水準きりのやうに思はれる。(注意の度合)それから注意の範圍は空間的には廣くも狭くもなる。したが廣い範圍に注意すると、其の中の微細な點は看過され、微細な點に注意すると範圍が狭くなる。この範圍は案外狭いものであるが、實際上に可なり廣い範圍に注意することの出来るのは、注意の推移と記憶の補助によるのである。(注意の範圍)』

『然し注意を惹くには何か刺激がなくてはなるまい。だから刺激の強い弱いなどが、注意の度合や範圍に影響しないものかしら?』

『それは勿論ある。つまり注意を惹くべき條件だ。第一は刺激の強度で、強い刺激は常に注意を惹くね。然し過度に強いと注意を長く保つことが出来ない。といふのは、不快の感情を呼び起す爲だ。又空間的に廣いもの——急に大川端に出たやうな——、時間的に連続するもの——長い汽笛など——も注意を惹く。第二は刺激の變化で、強い刺激も徐々に變化すると氣がつかぬ。第三は刺激の新奇であつて、耳目に慣れたものは注意を惹かない。第四は刺激の慣親とでも言ふべきもので、第三は思ひ設けぬものが注意を惹くのであるが、これは思ひ設けたもの、屢々刺激を経験したものが注意を惹くのだ。群集中で友人の顔が先づ目につくなどは此の例だ。第五は刺激の反復だ。非常汽笛などは第一、第二、及び此の第五とが合はさつて、消魂しく人の注意を惹く。第六は刺激の感情價で、勿論上の條件中にも此れに合するものはあるが、その外に何でも感情を激しく動かすものは注意を惹く。』

『極めて當り前だね。……それもいゝが、以上はみな注意させられるのばかりだが、自分で殊更に注意することだつてあるだらう。その場合には以上の條件が條件になるまいが如何だ?』

『鬼の首かと思へば、八つ所で 甚だ隣憫に堪へない譯だが、注意には受動的注意と能動的注意

とがある。注意の對象が何等の妨碍を受けずに自然に注意を生ぜしめる場合が受動的、注意の對象の備へてゐる條件に従へば注意が生ぜず、吾々が或る困難に抵抗して注意を生ぜしめる場合が能動的だ。其の間に何等の根本的な差異はないのである。……注意が最大度に達するには、即ち注意が出現するまでには一秒乃至一秒半の準備時間を要する。そして一旦或ることに注意すると、それに注意し続けることは、他に注意を轉ずるよりも容易である。これは注意の惰力だ。然し注意は同じ度合で永く続くものではない。必ず出沒し、揺る。それから注意は一方に於いては集中作用であるが、一方に於いては抑制作用だから二つ以上の事柄に注意を向けることは出来なう。』

『でもシーザーは四人の祕書に口授して手紙を書かせ、自分は五本目の手紙を書いたと言ふし、聖徳太子は七人の訴を同時に聞いたと言ふが……？』

『それは注意が五方七方に向いてたのではなく、注意が迅速に五方七方に推移分配され、然も偉大な記憶力が其の間の連絡を亂さなかつた爲だらう。……それから注意の効果が残つてゐるが、其の第一は感覺内容は注意されることによつて強度を減ずるといふこと、第二は注意によつて知覺

表象、記憶心像、相像心像が明瞭にされること、第三に注意は其の注意されたものの記憶を強めること、第四は注意が一方に運動を禁止すると共に、他方に運動を生ぜしめること。』

『それは一寸説明して貰はぬと分らん。』

『禁止の方は、意外のことに注意を奪はれて「開いた口が塞がらない。」といふ場合、促進の方は、相撲に身を入れて自分で力瘤を拵へて「肩が凝る。」といふやうな場合だ。第五は最も重要で、同時に二種の感覺刺激が與へられた場合に、注意を向けた方が先に現れるといふことである。つまり客觀的には同時に出現したものが、主觀的には繼續的に與へられたものとして感ずるのだ。』

『大分多岐に亘つたが、要するに注意作用の本質は如何いふ點にあるかね？』

『要するにだ。注意作用の本質はその注意の對象の知覺を明瞭にし、且つ注意されて居らない對象の知覺を禁止する點にある。注意が如何なる生理的基礎を有するかといふ問題は、主として此の二點を説明することであるが、恰度生理作用にはこれに相當する二つの作用がある。即ち反射禁止作用と開路作用だ。つまり一時に多數の刺激が來た場合、或るものは禁止作用によつて互に消し合つて効果を現はさず、或るものは互に助け合つて開路作用を起し、一層烈しい効果を現

すのだ。ここまではまあ受け取れる。然しこの禁止及び開路作用とは怎んな作用で、どうして行はれるかになると最う定説がない。だから注意の生理的基礎の説明は今分のところない譯だ。』

『何でも終ひになると解からないことになつてしまふんだな！』

『どうも甚だ相濟まないが、致し方がないね。但し、注意の生物學的意義は極めて明瞭だ。強い刺激、珍奇な刺激等は生物の生存に重大な關係があるから、成るべく早くそれに對して正常な態度を取る爲に受動的注意の喚起されることは、大いに合目的である。然し生物が進歩して豊富な經驗を積むと、この經驗を利用して各個體に必要な態度をとることになる。即ち能動的注意の現れた所以であつて、要するに注意は限りある精神力を、最も經濟的に利用したものであると言つていい。』

二記 憶

『ではもう一つの根本法則を聞かう。』

『一切の精神現象は、それが過去と未來とに關係する限りに於いて、この記憶の方則に隨はないものはない。で、記憶といふ作用はどんな作用かと言ふと、或る經驗が銘記せられ、或る時間の

間把持せられ、或る原因によつて何等かの形に於いて再生せられる作用である。』

『作用はそれでいいが、記憶の本質はどんなものだらう？』

『定義的に言ふと、或る入り組んだ精神内容が同時に又は連續して、つまり或る聯合關係を保つて意識に現れた場合があつたとすれば、後になつて前の内容の一部分が再び意識に現れた場合に、前に一緒であつた他の内容もまた意識に現はれるといふことである。』

『すると、詮ずるところ記憶は經驗の再生である譯だ？』

『さうだ。して記憶の有無強弱は、其の再生の有無難易によつて決せられるのであるが、再生を容易にする條件は三つある。第一は強い印象、第二は強い聯合關係、第三は多い聯合關係だ。それから記憶の反對は忘却である。』

『忘却は記憶の敵だな』

『ところがさうではない。吾々に忘れるといふことがなくて、凡ゆる經驗を活動寫眞のフィルムのように如實に記憶してるとすれば、折角の記憶も何の役にも立たない。何故とふに若しさうであるとすれば、過去の經驗を再生するには、現在からその過去の時日までの時間を要する。つまり

其れ丈の長さのフルムを逆に繰つてゆかねばならないのだ。「記憶の一條件として吾々は忘れねばならぬ。」とリボーの言つたのは、一見奇に似て實は奇でない。』

『物覚えの良い人と悪い人があるが、あれは天成かね?』

『天成だといふ人もあるが、無意味なことの記憶を練習して、他の材料に対する記憶を幾分か善くした例もあるから、記憶能力は練習によつて改良進歩させることが出来るらしい。……最後に記憶の生理的説明を少しするが、記憶は神経系統に於ける聯合的關係の成立に基くものだ。つまり同時に興奮した神経要素の間には聯合關係が成立し、後になつて其の要素の一部が興奮すると他の全部が興奮しやうとする傾向がある。然し新しい經驗が常にその上に重なり、同時に古い經驗の残した傾向が漸次に弱くなり、また後の經驗で變更されるから、前の興奮と後の興奮とは決して同一ではない。だから前の經驗の中で後に残るものは極めて僅少で、然も大部分は變化させられて、甚だ最も重要な點だけが原の性質を維持してゐる丈である……これで第二章はお終ひだ。まあ一服しやう。』

三、精神の機能と統一

甲 具體的要素

『以上で精神の抽象的要素と、その要素が意識過程として働らく基本的法則との、大體を説明し終つた。然し吾々の精神活動は統一的で、具體的なものだから抽象的要素の性質を其のまま具體的經驗に適用することは出来ない。けれども精神活動の不可思議さは、古來幾多の學者を浩嘆せしめた所のものであるから、いきなり飛び込んで統一的全體である精神活動を理解するといふことは出来ぬ。』

『どんな準備が要るのか? 話では解らないとでも言ふのか?』

『いや、それ程でもない。第一に必要なのは、精神の具體的過程を説明する爲には、精神の機能を基礎にして考を進めなければならぬといふことであつて、要り抽象的要素を説明するには分析的な見方を徹底さしてゆけば足るが、具體的過程の説明には分析的のみならず綜合的見方が必要であり、殊に機能主義の立脚地が必要だといふのである。』

『機能……機能主義といふと?』

『精神の活動上の單位は感覺運動圈で、これが驚嘆すべき紛糾錯綜して吾々の精神作用が出来るのであるが、吾々の精神過程も矢張りこの單位過程の形式に相當してゐる。即ち、外の刺激を受入れるのは「知」に當り、それによつて生ずる内部の變化は「情」に當り、その内部の原因から再び外に影響を與へる活動は「意」に當る。』

『然し其れを別々のものに見たら、また新しい抽象的構成要素になつて仕舞ふのではないか?』
『勿論、今は昔の三分法のやうに知情意を別々の精神作用としては見ない。ただ其れによつて統一的精神活動の場合々々に於ける、機能上の差別を捉へて精神の部分的活動を定めてゆくのである。そして其の目的の爲には、先づ最も單純な要素的作用を取扱はねばならないが、但しこれは抽象的構成要素の結合から成るものであるから、特に具體的構成要素といふのである。つまりこれは精神を構成する意識要素の上の區別では全く機能上の區別、換言すれば構成的要素ではなく機能的要素であるのだ。』

『では早速「知」の方からやつて呉れ。』

一 知 覺

『第一に知覺の説明になるが、先刻も言つたやうに或る瞬間に吾々に加はる感覺刺激は無數であるべき筈なのに、吾々の經驗内容は案外單純なのだ。つまり感覺と實際の意識とは一致しない譯で、此の實際の意識となつた分の感覺結合體を知覺表象——或は觀念——とよぶ。そして其の知覺表象の現れる過程を知覺——又は知覺作用——と呼ぶのだ。』

『して見ると知覺作用もやつぱり外界の刺激を受容する作用だな? 従つて知覺表象の中にはいふやうな感覺が含まれてゐる筈になるやうだ。』

『さうとも。實を言へば感覺は抽象的に考へられるばかりで、全くは感覺表象を分析してのみ得られるのだ。けれども反對に、それでは知覺表象は感覺の單なる結合かといふに、いろ／＼感覺には無い性質がある。それを並べて見ると、第一に知覺表象には感覺に存しない一定の秩序がある。感覺には性質と強度との差異があるばかりなのに、感覺の結合より成る知覺表象には如何して秩序があるかといふと、客觀世界には感覺の系統には少しも頓着しない一定の秩序があつて、それを知覺に強いるのだ。つまり全然客觀的原因による特色だ。』

『主観的原因から来る特色もあるのか?』

『ある。即ち第二の、各瞬間の知覚表象は當時の客観的刺激の與へ得べき感覺の總和よりも、遙かに少い内容を持つといふことだ。言ふ迄もなく、これは注意の簡拔作用がある爲である。第三は、感覺表象は現在刺激を與へないものをも記憶によつて補充すること、第四は、知覚表象は感覺と異つて常に意味を持つことである。』

▲ 空間知覚

『では其の秩序があるといふことから説明してくれ。』

『よし。知覚に現れた世界は、空間及び時間の秩序に排列せられてゐる。仍で先づ空間知覚から始めるが、常識的な空間の概念は數學の空間概念に影響されて、空間は一切無内容で空虚なものだと考へてゐる。然し實際の經驗に於いては、空間は充實してゐるもので、一定の内容の知覚に具はる秩序として經驗される。即ち其の秩序には上下、左右、深さ、形、大さ、距離等があつて凡て空間表象と總稱される。そして空間表象を與へるものは觸覺と視覺のみである。』

『すると其所に、少くも二つの種類が出来て来る譯だ? 觸覺によるものと視覺によるものと。』

『さうだ。觸覺的空間表象——觸空間——と、視覺的空間表象——視空間——との違ひが出来る。

先づ觸空間に就いて言ふと、吾々が皮膚に觸られると、何所に觸られたかが可なり正確に分かる。これは定位作用によるものだ。所で觸覺は身體の構造上から觸られた局部を臍氣に辨別することが出来るが、一般の定位作用は同時に視覺映象を呼び起して、即ち見る空間に翻譯して觸覺印象を或る場所に置くといふ譯だ。それと、距離や形状やの知覚には運動感覺と結合する。さうして定位作用を補充して、比較的確實な知覚となるのである。』

『視空間は怎んな知覚だ?』

『言ふ迄もなく、其の成立條件は網膜映象と動眼感覺である。網膜映象といふのは所謂「目にうつる」ので、鏡にものが映るやうに自ら映るのであるが、苟も見やうといふ場合には自ら映るのを待つてばかりは居られない。然し網膜映象だけでは確實な視空間が成立しない。仍で動眼感覺が必要になつて来る。これは空間の或る一點を擬視しやうとする時には、我識らず眼の運動が起るのであるが、この眼球の廻り方の方向を、眼球を動かす爲に費された力とが材料となつて、見た物の大さ、形状、深さ、遠さなどが知覚できるのである。』

『觸ると視るとばかりではなく、音を聞いても方向や距離は分かるやうだが？……』
『それも大いにある。つまり第二次的空間知覚で、今の聴覚はかりでなくて嗅覚も不完全ながら方向知覚を作ることが出来るのだ。この二つは補充的な知覚組成要素で、然もこれらは聯想の助を借りてゐる。……それでは時間知覚に進まう。』

B 時間知覚

『第一に、時間知覚を司る感官といふのは何だらう？』

『尤もな疑問で、實は特別な時間感官といふものはないのだ。だから吾々の知覚表象、或は知覚表象に結合した感情や情緒に、時間的屬性があると見なければならぬ。然し時間的性質を特に著しく持つてゐる感官は二つ有るから、それを順次に説明して行かう。第一は觸覺的時間觀念であるが、抑々時間觀念の發展は觸覺から起つたもので、時間觀念が成立する爲に、最も直接に關係のあるのは觸覺運動である。して觸覺運動は運動感覺を呼起すのであるが、この運動感覺の要素の中、就中時間知覺に關係のあるのは歩行運動感覺である。つまり歩く度に此の運動感覺の強さが變化してゆくから、時間の長さを識ることになるのである。』

『それでは運動感覺から直接に時間知覚が得られる譯ではないのか？』

『いや、待ち給へ。吾々は内容の空な、全く抽象的な時間を直接に知覚することは出来ない。何等かの具的な變化によつて知覚するのであるが、さればと言つて具體的事象から直接に時間を知覚することが出来ない。そこで歩行運動などから起る、感覺又は感情の時間的屬性から時間觀念を得るといふことにならねばならない。』

『それにした所が、觸覺的時間觀念の範圍は運動機官の條件に制限される譯だね。』

『さう。そしてこの制限を受けずに、一層廣い範圍を有するものが聽覺的時間觀念だ。調音や騒音に起る變化は、吾々が聽覺で知覚し得る限度の時間觀念の基礎となる。』

『前の歩行のやうに、何か例で説明してくれないと解りにくい。』

『聽覺的時間知覺の簡単な例は、振子を聞いて見れば分る。で、普通の歩行の速度で振子を鳴らすと、音と音の間は全然空虚ではなくて、一種の弱い感覺で填められてゐる。これは鼓膜の緊張と、鼓膜筋の緊張との生ずる感覺だ。そしてこれに感情の流れが伴つて、流れの波形は週期的に連續して、そこでは時間の経過が分るのである。……要するに、時間知覺の基礎は時律にある。』

この時律は吾々の根本的屬性によつて規定されるもので、若し吾々が時律的運動——呼吸や鼓動など——を営み得ない時は、時間知覚が精確に出来ないのである。さうして吾々の基本的運動は時律的運動だ。』

『偶には非時律的運動も現れないとは限るまいが？』

『それは然し時律的運動の破れた形だ。……だから動物が時律的運動を営むやうになれば、時間知覚を生じたものと見ていい。』

『なる程、然しその説明で見ると、時間や空間やの知覚は、必ず何かと結合して現れて来るやうだ。して見ると普通の時間や空間といはれるものは、この關係から抽象されたもので、その點で變覺や單一感情に幾らも違はないやうに思はれる。』

○ 感化と運動の知覚

『全く其の通りだ。仍で此の兩者を包含して、一層具體的になつたものが變化と運動の知覚である。で、最初變化の方から説明すると、變化を知覺する爲には、互に區別することの出来る印象が、殆んど同時に心の中で重り合ふことが必要だといふのだ。つまり變化の範圍と時間とから言

へば、變化の知覚は最小の變化の範圍が、或る限度の時間内に起るときに始めて生ずる。そして變化の方向が知覺される爲めには、變化は一層顯著でなくてはならないと言ふ。』

『で其の變化知覺の最小限度は、凡そどれ位のものかね？』

『その測定には色々な困難があつて、未だ正確には解つて居らない。ただ、變化の速度の大きい場合には、一層小さい變化を知覺することが出来るといふ事は知つて居る。』

『それでは運動の方は如何だね？』

『運動といふのは空間に於ける位置の變化である。だから先づ知覺者自身の運動、即ち身體運動の知覚が必要であるが、これは前に言つた運動感覺と平衡感覺とが與へる。それから外物の運動の知覚は、直接に外部觸覺及び視覺によつて與へられる。外部觸覺の場合は蟲が皮膚の上を匍ふのを知覺するやうなもので、この知覺は頗る精密ではあるが、然し觸覺は元來遠官ではないから、外物の運動知覺には大した役目を演ずることはない。大事なのは視覺である。けれども運動と静止とは相對的にのみ存し得るのである。』

『さうかね？』

『といふのは、吾々自身に運動感覚があるから、自分の頭を動かせば網膜上の映像は運動する譯だが、その爲に外部が運動したとは思はない。反対に眼球が運動してもそれが知覺されぬ時は、運動してゐるものと静止してゐるものを取り違へることがある。月が走つて雲が止まると見えるのはこれだ。つまり運動は静止に對してのみ知覺せられるのだが、然るに静止の知覺も絶對的に確實なものではない。何故といふと目に見える一切のものが、自分と同じやうに運動してゐる場合には知覺に上らぬからである。』

D 知覺の錯誤

『つまり錯覺だね。』

『一種の錯覺だ。外界の眞事相と一致しない知覺、即ち知覺の錯誤は錯覺と幻覺との二つになる先づ錯覺の方から説明すると、これは或る事象を他の事象と誤つて知覺することであつて、中樞的錯覺と末梢的錯覺との別がある。中樞的は狭義の錯覺で、普通所謂「見誤り」「聞き違ひ」等といふ種類である。これは類化の誤りで、よく注意すれば正しく知覺される。末梢的は吾々の體制から必然に起る錯覺で、正常な感官を有する者には避けることの出来ないものであるから、正常錯

覺とも言ふ。よく有る例で、同じ長さの平行線の兩端に、内向きに二本の角をつけたのと外向きに角をつけたのでは、外向きの方が長く見える。これは空間的正常錯覺だ。それから高くて強い汽笛の音は低くて弱い汽笛の音よりも、實際の時間は同じでも短く聞える。これは時間的正常錯覺だ。』

『幻覺のことは前に感覺のときに出たね。』

『さうだ、これは外界の刺激がないのに、或る刺激に相當する事象が客觀的に存在すると認めるのである、然し其の強度は眞の知覺と異なる所がない。このやうに錯覺と幻覺とは主として外的刺激の有無によつて區別されるが、その錯覺も内的刺激に起發された中樞的なものは、幻覺的要素が著しく現れて、甚だしくなると幻覺と區別し難いやうになる。だから錯覺と幻覺との區別は根本的なものではない。……随分、端折つたが知覺はこれ位にして、第二の感情の方に移らう。』

二 感情

『いやな返事だね。もう厭きたのか?』

『大丈夫だ。然し言ふ迄もないことだが、前に單一感情の説明は聞いたから、今度は具體的感情の説明になる譯だね?』

『さう、さう。例へば吾々がダリヤを見て美しいと思ふ場合に、この意識をば感情といふが、それは決して單一感情又は其の結合からのみで出来てゐるものではない。其の意識は一の具體的過程で、「美しい」といふ感情の中には幾多の感覺及び表象要素が含まれてゐる。だから感情とは感情要素の比較的顯著な知覺に外ならない。然し知覺過程にも感情要素が伴ふけれども便宜上無視して來たのだから、感情要素の顯著な知覺過程をば、感情の方面からのみ見てこれを具體的感情過程としても敢て不當ではなからう。』

『さあ、如何いふものかね?』

『いや、君に聞いている譯ではないんだ。感情は今言つたやうな種々の要素から成つてゐるから、各要素の顯著さと複雑さによつて、過程の性質に種々の差が出来て來る。仍で等しく感情と言ふ中にも、その性質が知的作用に近いものと遠いものとが出来る。昔から五情とか喜怒哀樂などと言ふのは、感情要素の最も複雑顯著なものであつて、單にダリヤの花が美しいなどといふ感情

と頗る趣を異にする。だから此れ等は特に情緒と言つて、一段弱い感情、即ち複合感情とは區別されてゐる。で先づ複合感情から取掛らう。』

A 複合感情

『複合といふからには、何か合はさつて出て居ることだらうが……?』

『なに、其れは大した事ではないので、單一感情の複合より成るといふ丈の話だ。然し極めて多岐多様で、單一感情に近いものから、情緒に類するものまで無數にある。が此れを大別して全體感情と部分感情とする。全體感情といふのは對象そのものの性質から生ずる感情であつて、例へば或る彫刻を見て其の調和的な美に打たれ、總體に美しいといふ一種愉快な感情の起るそれだ更に精細に彫刻を鑑賞して、各部分間の調和が美しくとれてゐると思つて感ずる快感は、部分感情中の高級部分感情である。更に微に入つて、其の一部分を上品だとか雅致があるとか感ずるのは低級部分感情である。』

『全體感情と部分感情との關係は如何いふ風なものかね?』

『それは多數の部分感情が結合して全體感情に影響するが、如何なる部分感情が重きをなすかに

従つて全體感情の趣が變化するんだね。……それから感情の發展の階段から見ると、觸覺、嗅覺、味覺の觀念から生ずる複合感情は、視覺、聽覺の觀念から生ずるものに比して遙かに簡單だ。前者は普通感情——一般感情——と言つて重に快不快に規定される身體的及び一身の要素が多く、つまり事物と自己との關係から起る主觀的なもので、後者は簡單美的感情と言つて、主として事物と事物との關係から生ずるものであつて、寧ろ客觀的である。』

『すると複雑な美的感情といふのもある譯だね?』

『それは道德や宗教や、其の他の實際問題と離すことの出来ないもので、今の簡單美的感情は實人生との交渉は比較的薄く、重に觀念組立の形式から生ずるものである。』

『それでは主に美學の領分で、寧ろ純粹美的感情と言つた方がいゝ位のものだ。』

『まあ、さうだね。所で普通感情は實在知覺に執して、自然美享樂には適するが藝術美享樂には適しない。然るに簡單美的感情は主に視聽覺の對象によつて起される適意不適意の感で、感覺の性質上の屬性に關するものと、感覺相互の外部的結合に關するものとの二つに分れる。前者は調和の感情で後者は比例の感情だ。そして前者は更に色彩調和の感情と樂音調和の感情となるが

これは説明する迄もあるまい。後者は形狀調和の感情——四六版、菊版、葉書の形が快い調和になつてゐる——と、時律調和の感情——五七調、七五調と言つたやうな調和——とに分れる、』

B 情 緒

『それが如何いふ風に變ると情緒となるのか?』

『吾々の精神生活には、時間的に連続して起る感情的結合の列が伴ふのであるが、この感情結合が前後の感情的状態から比較的に獨立を保つて、意識に對して簡單美的感情よりも強い結果を齎らす場合、この感情結合を情緒といふのだ。』

『情緒と複合感情との間には、截然たる區別はないといふことだが、然し大體の境界線はあるだらう?』

『それは、複合感情よりも一層複雑な感情要素の結合から成る、一定の経過を有すること、精神と肉體とに一層顯著な影響を及ぼすことである。その情緒が生ずる爲には兎に角何等かの觀念が必要で、強い情緒の場合には其の情緒の生じた原因となつた觀念が全心を占めて、他の觀念が遮られてしまふ。そしてこの情緒の経過の中には、二様の變化があつた何れかの途をとる。即ち、

第一は最初の遮る力がやんだ爲に、情緒を起した凡ゆる事柄に關する觀念が、急に心の中に群り生じて來るのである。』

『それには怎んな例があるだらう?』

『さうだね。例へば、或る好運に際會して最初は全く歡喜に心が充される。それと殆んど同時に、將來についての華やかな空想觀念が心の中に蝟集して來る、と言つたやうな場合である。……第一は情緒の生因たる觀念が始終心の中にあつて、他の觀念を入れないやうに抵抗する。例へば憤怒の際に、或る一つの觀念が執念く心中を支配して、他の諸觀念に抵抗するといふが如きである。要するに觀念と感情とが互に呼應して、そして情緒の経過を規定して行く。』

C 情 操

『さうだ。ところで其の情緒に酷似してゐるが其れ程に強い感情の経過がない代り、對象に於ける感情の永續的傾向のあるものを情操といふものだ。これは極めて複雑な全體感情であるが、常に複雑な知的程を伴ふからして、従つて感情の強度が微弱であるのだ。』

『言はば、知的感情とでも言ふべきものなんだな。』

『さう、さう、現にさう呼んでゐる人もある。仍で情操には大體四種あるが、其の第一は論理的情操だ。これは思惟や認識の作用に伴ふ比較的簡單な感情で、例へば疑惑、矛盾、眞偽の感情の如きものである。第二は倫理的情操で、自己の意志及び行爲に對する是非の判断から生ずるものであつて、發達すれば良心の満足又は不満足の感情となる。この方面の委しい研究は民族心理學倫理學の範圍である。』

『すると論理的情操の研究は論理學の範圍だね。』

『さう、そして第三の宗教的情操は宗教心理學、第四の美的情操は美學の範圍だ。宗教的情操は直接經驗する世界を超越する、不可思議な靈の存在に對して生ずる感情である。つまり信仰の問題だ美的情操は就中最も複雑な形を有つて居り、音樂、繪畫、彫刻、文學等の諸藝術に對して起る感情である』

三 意 志

『さて、今度は意志の番だが、普通には意識の要素を三分して、知、意と存立させ、意志を一種

特別な要素としてゐるけれども、直接經驗に現れる所では、特殊能力としての意志ではなくて具體的意志作用である。即ち多少明白な感覺及び觀念と結合して居る感情——主に情緒——の流れだ。この相結んだ流れが、前後の種々な精神作用から、比較的獨立に現れるのである。』

『待つてくれ。さうすると意志作用といふのは、要するに情緒と他要素との相關結合した流れに外ならないのだね。言はば或る特徴を備へた情緒の流れだ。そこで問題は情緒が意志過程に變るには、どんな特徴がなくてはならないかといふことになるやうだ。』

『答へて曰く、意志はその経過の中に、一種特別な弛緩をなす情緒であるといふのだ。前から繼續してきた情緒の流れを、觀念的或は情緒的な或る新しい内容によつて、急に遮斷する作用、これが狭義の意志作用である。そして前から繼續してきた情緒と新内容とを。引つくるめて言へば即ち意志過程といふのだ。』

A 意志の動機

『成る程。然し情緒を急に遮斷するといふが、それは如何して出来るのか、遮斷するものか何であるかに對して疑問が挿める。』

『勿論、それは正常な疑問だ。この情緒を弛緩せしめ、遮斷し、終了せしめる意識的成分を、意志の動機といふのだ。』

『少し執念こいが、その動機といふのは如何いふ譯のものだ？』

『動機といふのは、繼續してきた情緒を終了させる條件で、前々から情緒の流れの中に於いて發展してきてゐるもので、何も特殊の要素ではない。その主成分は感情要素で、これに觀念的要素の結合したものである。そして此の兩要素の働き方の大小によつて、種々の意志作用の趣が露れてくる。例へば、兩要素の内容の数が少く、意志過程の短い場合は衝動又は本原的意志作用——その外に現れたものが衝動的動作——であつて、情緒の流れの進む間に、個々の感情内容と觀念内容とを多數に包攝して、これを徐々に發展させて動機の性質を帯びしめるに至る場合は、普通の意志作用又は二次的意志作用といふのだ。』

『例へば、を忘れないやうに。』

『例へば、急に或る危険に面接して、突嗟に自己防禦をするといふ時は前者だが、或る人の或る行爲に對して怒りを感じ、その怒りが漸次發展して或る限度に達し、茲に新しい動機となつて何

等かの動作を起すといふ時は後者である。』

B 意志過程

『では意志過程を説明して貰はうか。』

『意志過程は前にも言つた通り、始めの中は情緒の流れと同じだが、終になつて著しく異つてくる。してこの終末の段階は、始めの情緒の流れは種々雑多であるが、凡ゆる意志過程に於いて同一の形をとる。つまり終末階段に於いて緊張と弛緩、興奮と沈静との兩方向の感情が、一種獨特の結合をなし、同時に感情内容と觀念内容とが融合して、感情の轉化を生ずるのだ。そしてその兩方向の感情の結合が吾々に活動の意識を與へるから、それを特に活動感情といふので、これが意志過程の基礎となる。だからこの活動感情に一々動機が參與して、個々の意志過程に多様な特色を與へるのだ。』

『然し、活動感情は一つであるか知らんが、動機は必ずしも一つとは限るまい。意志が眞直に一本道を進むやうな場合は、實際に於いて稀だから。』

『勿論、多の動機が並存し、相互に抑壓する場合がある。意志過程の初期が、甚だ複雑を極め

るのは之が爲だ。けれども末期に進むに従つて、單一の動機が優勢を占めて活動感情と融合し、一つの分解し得ない全體感情を生ずるのである。これを決定感情といふ。』

『然し意志過程は決定を以て終了するものではないだらう?』

『さう、もう少しある。この決定感情は直ちに弛緩感情を起し、これが又他の感情と融合して更に新しい全體感情を生ずる。これが履行感情——満足感情——だ。この感情が起ると共に、動機は全く意識から消え去つて、意志過程は終結する。』

『さうか。然し大事なのは意志過程の末期、つまり其の意志作用にあるやうだね。』

C 意志の分類

『通例はさう見える。だから意志作用に基いて意志の本質を定めやうとする企も出来るのだ。即ち其れは結果的・分類で、それによると意志の決定と弛緩とが外に破れない内部意志作用と、意志の決定と弛緩とが外部の筋肉運動を伴ふ外部意志作用になる。』

『動機論といふのがあつたやうだが……?』

『あれは倫理説の方だ。然し動機から意志の本質を定めやうといふ分類の仕方もある。つまり動

機・的・分・類・で。簡・單・意・志・作・用・と・複・雜・意・志・作・用・とに分れる。これは動機の一と多數のとの區別で、前者は一義的に規定されるから衝動作用、後者は多義的に規定されるから有意作用といふことも出来る。……第三に最も心理的な分類は、動機及び發達・的・分・類・である。その一は衝動作用で、これは前の簡單意志作用と同しだ。その二は有意作用で、前の複雜意志作用に類するものだが、始は多數の動機があるが過程の進むにつれて單一の動機が明白になり、他は皆漠然と並存するといふ印象を残すに過ぎない場合である。第三は選擇作用であつて、始から多數の動機が對立し、互に競争して最後に一の動機が他を驅逐する場合だ。』

『然し、三つとも本質的に差異がある譯ではないやうだね。殊に第二と第三とは、實際の場合には差別が立たないだらう。』

『ただ組織が複雑で、強度が大きいといふ丈だ。だから第二の場合の決定感情を決心感情と云ひ第三のを決斷感情と言つて、大凡の區別をして置くのだ。』

D 意志の自由

『それは別として、意志は自由だといふことがあるが、果して自由と言へるものかしら？』

『それに対する答は、自由の意味によつて違つてくる。單に無原因、無法則といふ意味ならば、立派に動機といふ原因があるから自由とは言へない。一步を譲つて、その動機が無規定に自由かと言ふと、これは内外の刺激に對して、吾々の精神が反應するが故に現れるものだから、さういふ意味で自由だとは言へない。』

『どうやら意志は不自由になつてくるやうだね。』

『所が決してさうではない。何故といふと自由とは無規定、無法則を意味せず、個々の意志が吾々自身によつて決せられ、外界の原因によつて決せられないといふことであるからである。』

『吾々自身によつて決せられるとは？』

『例へば或る決斷に迷ふ場合、取捨の二動機に對して、過去の無數の輕験が再生され、吾々がどつちか一方に味方して、つまり副動機となつて主動機を援けて其の決定に參與する。だから實際は、その決斷は主動機が自ら爲したものではなく、過去の經驗から來る諸傾向が爲したものである。そしてかういふ諸傾向の總和は性格又は品性であるから、此の意志は性格によつて決せられたものだ。従つて單なる動機のみで決せられたものではないから、或る意味に於いて自ら決した』

もの、即ち自由であると言つて差支ない。』

『すると、意志は皆自由だね。少しも過去の経験に關係しない、言はば多少とも性格によつて決せられない意志といふものは、考へることが出来ないからね。』

『さう言へばさうだ。然しまた不自由だとせねばならない場合もある。第一は、動機の動搖の爲に決断後になつて反對の決断も亦可能であつたと感ずる場合を自由とする。すれば動機の抗爭のない意志は非自由な譯だ。第二は、目的表象が實現された場合を自由とする。さうすれば目的觀念のない意志は非自由になる。第三は、自分に對抗すると感ぜらる動機に打勝つた場合を自由とするので、この時は對抗動機に負けて其の動機を實現した場合は非自由である。この三つを混同するからいろ／＼曖昧になるのである。』

『然し要するに、自由といふことは、自己決定といふことと同意味であるやうだね。』

『さうだ。そして自己の意味の大小によつて、自由の意味も色々になるのである。』

乙 精神的結合と統一

『精神の具體的要素は、以上の表象、感情、意志でつきてゐるから、精神作用の基本的な知識に

對する説明は、單簡ながらこれで終つた譯だ。けれども吾々の精神は極めて複雑な發達を遂げてゐるから、各要素が紛糾錯雜してゐて、單に要素に關する知識ばかりでは手がつけられない有様だ。けれども其れ等は最早や一般心理學の問題ではなく、特殊心理學や、その他の精神科學の領域に屬するが、比較的簡單な作用だけはもう少しある。……それを精神的結合と統一といふことにしてひつくるめて話さう。』

一 精神的結合

『多くの精神的要素から成り立つてゐることを、證明することが出来る意識作用を精神的結合と言つて置く。して此の結合の具合に二種類あつて、受動的なものは聯想的結合、能動的なものは統覺的結合といふ。』

A 聯想的結合

『多くの精神的要素が、受動的に結合して働く……兎に角それは感覺でなくてはならない筈だな。』

『さう、第一に感覺の融合だ。これは最も簡單にして根本的な形だ。つまり知覺觀念を生ずる場

合のやうに、感覚が相互に融合して働くことだ。點を知覚するにしても、その箇所だけの視覚では出来ないで、周囲の箇所の視覚と合せて始めて知覚できる、といふ類の働である。第二は類化。これは外部刺激に應じて生じた觀念に、過去に経験した觀念要素が結合して來る作用で、知覺の際に著しく経験されるものだ。』

『どんな場合に、所謂著しく経験されるだらう？』

『例へば指を交叉して、その交叉點で豆か何かを觸れば、一つではなく二つと感ずる、これは日常経験から類化するからである。元來事物の印象が感覺に入つただけでは知覺が成立するものではない。平生の経験から類化されて始めて成り立つのである。そして類化作用には、よく見ると辨別と再認と認識との三作用がある。辨別とは例へば、赤球と白球とを見分ける場合、形は共通だが色の差を見分けるのである。この辨別作用には類化が基礎となり、これに分析作用と或る種の感情とが加はつたものである。再認といふのは例へば二度目に或る人と逢つた時は、最初の時と同一な印象を得ることはないが、當時の狀況の要素が類化してきて、同一人であると分かるのだ。』

『すればこれは、過去に現れた觀念が、後に見た事物と類化を起すのだな？』

『さう、さう。認識はまた甚だ再認と似てゐる。即ち、過去の多くの経験が、現在の印象に結びついて一の複全體を作るのだ。つまり現在に其の印象はないけれども、過去に受けた印象が誘因となり、それに他の要素も加はつて類化するのである。』

『言はば再認と認識とは本質上の差はなく、類化要素たる過去の経験——さうだらう——が、少い時は前者で多い時は後者だといふのだらう。』

『さうだ。知らない土地に行つて樹を見ても、誰も馬だらうとは思はない。すぐに樹だと認識するのは、つまり過去の経験が基礎となつて類化が行はれるからだ。第三が混化といふので、例へば天鵞絨を見ては、誰でもすすすべして柔かいといふ感じを起すが、これは現在の視覚印象に過去の觸覺觀念が結合したのである。吾々の觀念といふものは、現在印象に過去觀念の結合したものであつて、その過去觀念は大抵は現在印象と種類の違つたものである。で、かういふ異種類の要素から觀念を生ずる作用を混化といふのだ。』

B 統覺的結合

『では今度は能動的な方面に及ぶか。』

『然し断つて置かねばならないことは、これは全然受動的な作用がなく、純粹に、能動的だといふわけではないといふことだ。聯想的結合を含んで更に能動的に働くのであるから、寧ろ受動と能動の協同作用と言つた方がいゝるも知れない。統覺的結合には個人の意識全體と、その素質とが興かるのであつて、第一は想像作用で、第二は理解作用だ。……尤も想像と理解とは、何れも知覺の具體的な内容を、系統化して模倣し創作するものである。即ち、觀念に感情的要素と、經驗の不明瞭な内容との複合體を明瞭に分解してゆく作用だ。』

『然し、殊に想像は分解よりも寧ろ構成してゆく作用のやうに思へるが……？』

『勿論、分解と言つても無意味にバラ／＼に切り離すのではない。それに想像には綜合と分解との二作用が纏れて行はれるのであつて、更に二つの段階がある。一は比較的受動的で、過去の觀念を空想的な考で一定の順序に並べる受動的想像、二は或る目的觀念が現れた場合に、それを達成するに適した精神的結合を試るのである。つまり強い意志が、記憶心像に干渉して、或ものを禁止し或るものを選抜して、その選抜した心像を意志的に行動に現はす能動的想像だ。だから其

の分解も目的あつての分解だから有機的であつて、心の分解作用が形となり、其の痕跡を具體的に現はしたものが藝術上の創作である。』

『では理解作用は？』

『この作用の根本動機は、經驗の内容に於ける一致と差異との關係、及びそれから來る論理的關係を知覺するにある。つまり現實的な雜多の經驗を意志的に統一するので、統一せんが爲に分解はするが、その分解した各要素を互に關係させ、比較して、その間の一致不一致を發見するのである。』

二 精神的素質

『人にはいろいろ素質といふものがあるやうに聞いて居るが、果して如何いふものかしら？』

『確かにある。けれども「あの男は素質がいゝ。など、いふ場合は、精神全體としての能力に過不足ないことや、或は或る方面の能力が秀でてゐることなど、場合々々によつて違ふから別として、大體人の素質には三方面がある。即ち知的素質と、情緒的素質と、意志的素質とだ。』

A 知的素質

『知的素質……といふのは先づ精神的結合の具合によるやうに思はれるが。』
 『さう、さう。第一は記憶素質で、その中に統覺型、聯想型——これが二つに分れて、視覺型と聽覺型になる——、天才型がある。先づ統覺型は所謂注意を集中するといふ質だ、複雑し混雜した事柄を一定の組織にして記憶する型だ。聯想型の中の視覺型は物を視覺に直して記憶する質、聽覺型は聽覺に直して記憶する質である。つまり會つて見たこと、會つて聞いたことの印象が再生の手がかりになるのだ。』

『天才型といふのは、何か特別の能力があるのか？』

『人として別に不思議な能力がある譯ではない。これは統覺か聯想かの型であるが、結合の働きが普通以上に敏捷だといふ丈だ。だから大して練習を積まずとも、數學的天才や語學的天才などがある譯だ。……それから想像素質だが、想像の特徴は感覺的生命を湛へ、直觀性を有する全體複合觀念が材料として現れる所にある。これが漸次分解してゆく場合、その具體的な痕跡が藝術作品だといふことを前に言つた。だからこれは、殆んど藝術的素質と言つてもいい。』
 『そして理解素質は科學的素質か。』

『まあ、さうだ。然しこんなことは、一々定規のやうに當て箝まるものでないのは勿論で、現に理解素質と音つても常に想像素質と結合せずには現れない。これらの特徴は、想像素質にあつては思惟の材料に直觀を用ひるに反して、概念を用ひる點にある。想像の産物は藝術上の作品であつて、實在上の完全な形をば個々の形に寫し、知覺に現れた實在の内容を直接に經驗させる趣がある。所で理解の産物は科學上の業績で、實在の間に存する普遍的關係を現すものである。然し普通の思想活動といふのは兩者の混交したもので、その種々の組合せで才能が分れて來る。一寸表にして見れば、

	想像素質	理解素質
直觀的	歸納的	演繹的
概念的	發明的	思索的

才 能

といふ風になる。』

『なる程ね。で此の四つの才能には、各々どんな職業が適してゐるだらう？』

『さうさね。觀察的才能を必要とする人々は、先づ實行家だ。就中、自然的研究家、實際的教育家、心理學者、形象美術家等が主なるものだらう。發明的才能は説明までもなく、分析的才能を要する方面は、直觀的の方が主となれば形態組織方面、即ち植物學者等が最たるもので、演繹的の方が主となれば幾何學者等に最も必要な才能だらう。思索的才能は哲學者、數學者等などであるのは言ふ迄もない。』

『然し、これ等の中を二つを兼ね、三つを兼ねることも出来るだらう。』

『それは勿論で、不具でない限りは此の四つの才能を有しない者はない。然し就中その人にとつて優れた才能といふのは大抵一つかしかない。尤も偉大な精神になれば、その第二第三の才能が凡人の第一才能に遙かに優ることも可能で、例へばゲーテなどは、藝術家として觀察的才能を多分に有し、自然科学者色彩學者としては分析的才能も發明的才能も一流で更に哲學者として思索的才能も立派なものであつた。……然し一般から言ふと、この表の飛車道の結合は大抵の場合普通で、角道の結合は至つて困難だといふことはある。』

欠

欠

を惹く印象に對しては膽汁質となり、決心を實行する場合には粘液質となる類だ。』

C 意志的素質

『成る程。解つた……それでは意志的素質といふのは？』

『これはつまり性格だ。尤も性格と氣質とは密接な關係があつて、普通は混用されてゐる位だから仲々區別し難いけれども、よく見ると確かに違ひがある。言はば、氣質は無意的衝動的の反應に於ける素質である、が性格は意志的思慮的の反應に於ける素質である。然し意志作用の起原は情緒にあるから、氣質が性格を規定することは甚だ普通だが、性格が氣質を左右するといふが如き場合はまあ無い。』

『性格の分類はどうなるんかね？』

『それは標準によつてどうにでもなるから明確には分け難いが、大體二つの見地から類別するこ
とが出来ゝ。量的見地と質的見地だ。』

『性格の量……的見地？』

『性格の強弱と言つてもいい。先づ性格が有りや否やを問題にするのだ。つまり意志の働く方向

に統一があるかないか、動機に撞着があるかないかである。統一のある者は性格を有し動機に撞着ある者は性格を有しないのである。』

『「神の如く弱し」などといふ場合の弱い性格といふのは？』

『軟弱な性格、動搖的性格だ。即ち、選ばれた動機が、場合々々によつて變化常ない、つまり統一がないのである。之に反して、一貫した統一的な意志動作の現れるのは強固な性格である。』

『すれば弱い性格といふことは、性格がないといふことだ。』

『まさか全然統一のない者はあるまいけれど、兎に角、弱きに従つて無に近く譯だ。……そこで質的見地による類別だが、これは道德上の標準に従つて、強弱に關作なく良不良の分け方だ。忠實、公明、懶惰の性格といふが如き類で、これは實用心理學中の性格學の任務になる。』

三 精神的進程

『もうこれでお終ひだから、總仕舞のつもりで精神全體の過程、即ち意識の發展の経路について説明して置かう。だから始めと重複する嫌がないでもないが、然し強ち無用の業でもあるまい。そこで順序として、

A 意識成立の條件

から始める。意識は吾々の心の或る状態、又は或る作用の存在を、直接に經驗することから成り立つ。その状態、その作用を離れて意識があるとは、經驗上どうしても言へないことである。だから意識の定義も、意識が現れる場合に、如何なる條件が附隨するかを言ふより外はない。ところで其の條件は二つに分れる。第一は直接經驗に屬する、ので、即ち精神的作用の相關結合である。第二は間接經驗に屬するもので、即ち精神系統の相關結合だ。』

『つまりそれが無くては意識は現はれないのだ。序だからもう少し碎いて説明してくれ。』

『吾々の直接經驗に現れるものは觀念である。觀念は即ち感覺の結合で、單獨の感覺は抽象の結果だから意識には現れない。感情でも同様に、必ず複合感情が現れる。だから意識の特徴は、精神的要素の結合であつて、いろ／＼精神的作用が相關結合しなければ吾々に意識が湧いて來ないのだ。この結合が斷たれば無意識となり、疎になれば意識が不完全になる。』

『それは直接經驗の方だが、間接經驗の方はどういふことか？』

『精神的相關結合のある場合は、具體的狀態の相關結合がある。刺激に反應して運動の起る場合

には、意識が媒介するのであつて、意識が統一的であれば従つて全體も統一的に働くのだ。例へば大脳や延髄や脊髄等に獨立の意識があつて別々に働くのではなく、働く時は相關結合の形で働く。即ち、神経系統の作用の相關結合が、意識成立の生理的基礎であるといふのだ。』

B 意識の發程

『その意識は、生れ乍らに備はつてゐるものだらうか？ それとも何時頃から現はれるものだらう？』

『嬰兒に於いても觀念の結合を認められるから、意識の發端は解らないが、少くとも生前に歸せねばならない。そして意識發展の初期には、先づ身體に關係深い觀念及び感情の集團が、他の集團から分離して現れる。つまりこれは吾々の生活作用、身體機官の状態、又は四肢の運動等に結合してゐる觀念及び感情の集團であつて、比較的永久的な集團となつて意識に現れる。これが意識結合の中心點となるので、他の意識内容は動搖性が大きく且つ永久的でないから、この中心點に結びついて種々の意識状態を現はすのだ。そこで此の中心的集團を、意識の恒常内容といふ。』

C 自我意識の發達

『それが要り自我意識……とは違ふかな？』

『少し違ふ。それは自我意識の原始的、初歩的段階だ。未開人や小兒の自我意識はこれで、全く肉感的な意識状態、肉身的觀念の系列にすぎない。この簡単な意識の恒常内容、即ち自我意識の素がやがて次第に發達して、自我中にある意志と、意志に依存する觀念が中心點となり、更に進んでは統覺作用が自我の支持者になる。そしてこの統覺作用に關係する自我意識が、高尚な自我意識であるのだ。』

『愚問かも知れないが、自我の本質は抑々何だらうか？』

『必ずしも愚問ではない。自我意識の發展経路から言へば、身體的觀念が出發點であつて、それと感情とを除いて自我を考へることは出来ない。茲に於いて、自我の本質は觀念か感情かといふ問題になる。然し、少くも心理的にはそれは感情で、全體感情が自我の基礎をなし、就中主となるものは統覺作用と結合した感情である。即ち、自我意識は身體我から精神我に發展してゆくのである。』

D 我と物の對立

『自我は凡そ解つたが、よく物心二元とかいふことを聞くが、心理學の方ではそれについてどんな事をついて居るのか？』

『恒常内容或は自我意識が、他の意識内容から分離するに及んで、我と物、主観と客観の差別が出来る。これが基礎になつて常識的、二元觀や、更に哲學系統の二元論を生ずるに到つたものだ。然しだ。我と物とは吾々の經驗に先つて區別されてゐるものではない。現に吾々の初歩の經驗、即ち嬰兒にとつては我と物との區別がない。のみならず自我意識の發達した後でも、判然と區別し難い點があるから、要するに自我は意識發展の際の產物であつて、物我は絶對的區別のある意識内容とすることは出来ない。更に言へば、吾々の直接經驗は統一的な内容を有し、その内容は相關結合して存する。そして其の結合に論理的考察を加へて、假りに我と物との區別を立てることが出来るだけである。この區別を、如何に考ふべきかは哲學の領域であるのだ。』

E 人格と個性

『然しその自我は、少くも一貫したものではあるのだな？』

『とも言へるし、さうでないかと考へる。先づ吾々の生活は、今まで言つたやうな統一的具體的活動の連続であつて、この連続が即ち人格だ。然るに具體的活動の動機は、常にその時々印象に左右されるから、人格は常に變化すると見ねばならない。又一方から言へば、具體的活動を内部から規定する諸條件は、先天性と經驗の蓄積とに基くもので、従つて各個人に一定してゐるから、人格は無秩序に變轉するものではないと言へる。』

『何だかややくしくなつてきた。全體、自我と人格とは同じものか、それとも如何違ふものか？』

『さう、がちやく言はれると困る。……要するに、人格は一定不變を意味するものではない。然るに意識では人格を不變と考へる所以の者は、人格といふ觀念と人格の中心を形成する自我といふ觀念とを混同して、自我が一定不變と考へられてゐる事實から、轉じて人格不變の考が出たものであらう。』

『自我は……不變だつたけかね？』

『冗談を……。自我は經驗の主觀的側面、對象に對する順應作用である點で、兎にかく一貫はしてゐるが自我の内容は絶えず變化してゐる。けれども、自我は心的活動の恒久的要素として、如何なる經驗にも内在してゐるのだ。吾々は常に自我意識を有して居るものではないが、注意をさ

へ向ければ何時でも自我が居る。そして自我觀念を組立ててゐる要素の連続が、自我感情を不變のままに存続せしめるから、現在の自我とその前の自我とが同一であると認識され、従つて不變であると感じられる。そこで自我は經驗の不變の核と考へられるやうになる、それ故に、若し人格を吾々の心身の具體的活動の連続とはせずに、かういふ活動の根本となる實體として考へれば、人格は結局自我と同一視され、自我の不變は人格の不變となつて殊る。これが常識的な見方だ。』

『學的に見れば、さうではないと言ふのだね?』

『心理學的に見れば、人格は常に變化し、同一個人についても、場合々々によつて同一ではない。然しこの變化は無秩序ではなく、各人には固有性があつて、即ち個性があつて略同様な外部事情の下に於いても、個人の活動に大差が出來てくる。今その外部事情——自然的及び社會的——の全體を境遇によつて規定されるものであると言へる。従つて、個性は人格の差異を生ぜしめる内的原因の總體であると言ふことが出来る。』

『その個性といふのは、先刻の精神的素質である譯だな。』

『さうだ。そしてそれは今では寧ろ常識的な見解だといふので、近年になつて起つた差異的心理學又は個性心理學は、實驗的に個性の差異を確立しやうとしてゐるが、未だ纏つて結果が擧つて居らない。』

四、心理學的の諸問題

『今までの話で、兎に角精神現象の大體の仕組が解つたらう。そこで翻つて心理學といふものを一つの全體と見て、その位置と關係とを考へて見やう。第一に心理學の位置は何所に占めてゐるか? それを説明してから改めて心理學の對象、研究法、分科、應用などを、一通り話すことにしやう。』

一 心理學の位置

『心理學の位置といふと、今は知らないが元は哲學の一分科であつたやうだね。』

『今でも、未だ完全に哲學から解放されてゐるとは言へない。……そんなことを説明する爲めに先づ精神科學の大體の體系を話さねばならない。……尤も、自然科學に對するものとして精神科學を立てるのは不當で、自然科學對文化科學でなくてはならない——リツケルト——といふ論も

あるが、今はさうまで嚴格なことは言ふまい。意義は多少違つても、内包は大體同しなのだから便宜によつて精神科學の概念の確立者キルヘルム・ウンツの言ふ所を、簡單に取ついで見やう。』

『よからう。こつちは解り易い方が何より結構だ。』

A 精神科學の起原

『よからうとあれば、順序として精神科學の起原から述べねばならない。……精神科學は數學や自然科學と同じく、哲學から生れてきたものである。自然科學は自然哲學から生れ、精神科學は人生哲學、即ち倫理學から生れた。して其の倫理學は、始めは人間の行爲の動機の觀察から生じたもので、極古い道德生活の規約は、自然現象に對する素朴な反省と同じに、常に科學的思索の本源であつた。然るに自然研究は最初は専ら宇宙論であつて、宇宙論は宇宙の生成發展を論ずるのだから、人の心の性質を研究すべき科學、即ち心理學も始めは自然哲學の一分派であつた。』

『はてね、すると心理學は精神科學よりも自然哲學、自然研究の方の一分派であつた譯だね?』

『さうだ。それから形而上學の一問題として取扱はれ、後になつて獨立の研究に入つた。かういふ事情だから、心理學は當然精神科學の基礎科學でなければならぬ筈なのを、精神科學は各々

別々に發達して、これ等が集つて自然科學に對立すべき統一體系であるといふことは、極めて最近になつて認められたのであつた。』

『すると、精神科學といふ名も甚だ新しいわけである。』

『それにはまた理由がある。第一は精神科學同志が錯綜してゐて、限界の定め難かつたこと、第二は精神科學には基礎學科がない。自然科學には力學といふ基礎があるが、精神科學には何もなかつた。』

『それは困つた問題だが、何か無いものかしら。』

『現在の科目から、何れかを基礎科學とすることになれば、文學、歴史、社會學などいろいろの説が出るであらう。然し、それは例ひ同意者が少くとも、心理學でなくてはならないと言ふのだ。』

B 精神科學の對象

『それにしても、精神科學にはその共通點がなくてはなるまい? 精神科學の對象は一體何であらう?』

『それが又中々厄介なんだ。自然現象の連關は、直ちにその空間的關係によつて直接に觀察され、

早くから共通な基本的假定が現れてゐた。然るに精神現象は常に物質界にも屬して居て、従つて自然科学の領域中にも入れることの出来る客體にのみ現れる。……細かい議論は抜きにして、結局精神科學の對象は何うであるかと言へば、それは人類であるといふのがヴントの答だ。勿論、これは抽象し孤立した人ではなく、自然によつて圍繞され規定される、現實の人類である。』

『人類の外は、精神科學の對象にはならないといふのだな？』

『人類に關することの外は、だ。例へば動物などでも、人類と同じ自然環境に居ることと、精神の心理學的發達史にとつて重要であるから、到底無視することは出来ない。』

『序に自然科学の對象との區別を明かにしてくれ。』

『要するに、だ。現象の本質的要素としての、意志し思惟する主體たる人類が精神科學の對象で人類の精神的方面が問題外となる現象は、凡て自然科学的考察の對象であるといふのだ。従つて、精神科學の對象と雖も、他の見地からすれば自然科学的考察の對象ともなるし、精神科學は、精神現象に對して自然の條件が及ぼす影響を、無視することが出来ないと言ふのである。』

○ 基礎科學としての心理學

『精神科學の對象が人類であるとして、それが怎んな形式で對象となるかが問題だな？』

『先づ、吾々の經驗に與へられるものは個人としての自己だ。これを基點として人類の結合體に伴ふ現象の認識に及すのだが、個人の認識が一般に適用されるには、其の普通妥當的性行であるから、個人が客體となるのは個體としてではなく種屬としてである。だからこの種屬としての個人である交體の認識が、精神科學の諸領域に於ける凡ゆる研究の根本條件で、而して此の普通妥當的性質に於いて、人類を對象とする科學は心理學であるのだ。』

『すると、原理上その心理學が、凡ゆる他の精神科學に對して、基礎的科學となるべしことは自明になつた譯だ。』

『原理上は如何にもさうだ。けれども其れが一般に承認されて居らないのだ。そして其の理由には少くも二つの點がある。第一は、心理學の不完全な現狀と心理學の任務との混同で、第二は心理學そのものの任務の誤解である。』

『心理學の現狀はそんなに不完全なものかね？』

『何しても獨立の科學となつてから、日も未だ淺く、従つて簡単な現象の研究が主となつてゐる

から、直接に心理学の應用が利かないのである。それが爲に心理学の無能が叫ばれてゐる譯だが、然も歴史家の用ふる知識、本能等が普遍的に理解される爲には、それによつて作られた概念も普遍的一義的に、即ち心理學的に解釋されねばならない。そしてそれを爲す爲には、心理学が事實を基礎としてなければならぬ。』

『事實を基礎とするとは？』

『事實とは人類の意識過程だ。即ち、感覺、感情、表象、情緒、意志等の過程と、及びこれより生ずる行爲だ。だから苟も人類意識の所産である限り、精神科學の對象は心理學的に解釋し得る可能性を有する筈で、そして其れに普遍的、心理學的解釋を下すのが、即ち心理學的の任務でなければならぬのだ。』

D 心理学の位置

『任務は、相當明快に相解つた。任務が解つたから位置も分つた、とは言へないやうだ。』

『それは誰でも言へない。心理学は漸つと哲學から解放されかけて、漸つと實證的研究の獨立した方法を取り始めてゐる、幼稚な一科學であるけれども、この現状を以て、心理学の位置を定める

のは不當である。』

『では、それを定める標準は何だ？』

『それはその任務だ。任務の性質だ。心理学がその性質上から言つて、現に最も普遍的な精神科學であつて、同時にその基礎科學であることは疑ひない。併しその哲學との誤つた結合は、甚だしく獨立の發達を阻碍するものだから、この結合を解除するが第一の先決問題だと言へる。』

『哲學との分離が正當に行はれたとしても、それで心理学の位置が確立したとは言へないではないか？』

『勿論だ。心理学の位置に對する標準は、第一に心理学は精神科學の基礎科學であるといふこと、第二に心理学は自然科學と精神科學との限界領域であるといふことだ。』

『限界領域……？ つまり交錯地帯だといふのだな。』

『左様、人類は精神科學の對象であると同時に、自然物として自然科學、特に生理學の客體であるから、身體内の心理過程と物的過程との間には、密接な關係がある。だから一方では自然科學的方法と類似の方法が用ひられ、他方では諸精神科學の標準となる見地が、最も基礎的な形式で

行はれる領域であるといふのだ。』

『言はば、心理學は凡ゆる精神科學の基礎學科であると同時に、自然科學と精神科學との兩界の橋渡しをするものだと言ふのか？』

『平たく言へばそれに違ひない。従つて、さういふ性質があるから心理學の内部に於いても、普通心理學——個人心理學——から、或る特殊領域が分れ出て、相方の交渉を媒介する。即ち、精神物理學は物心兩過程の相互關係を整理し、民族心理學は言語、藝術、凡俗のやうな人類の個體が精神的共同體に結合した結果から生ずる現象を研究してゐる。また實用上の分科として教育學が加はる。これは手段が心理學的で、目的は倫理的であり、特殊の方面ではその他種々の知識領域に入り込むものだ。』

『で、それらは皆心理學が中心である譯だね？』

『さうだ。かうしてこれ等の普遍的精神科學をば總稱して、心理學的科學と言へる。これに對して、歴史、文献學、法理學、國民經濟學等は皆特殊精神科學である。何故かと言ふと、これ等は精神發達の一方面、又は精神的所産の個々の形式を引出して、特殊の區分内に於いて考察を施すからである。』

『心理學的科學と特殊精神科學とは、勿論交渉があるだらう。』

『それは必然的だ。凡ゆる精神科學は皆心理的科學の研究資料を提供し、又心理科學の結果は、個々の精神現象の解釋に對して、有效なる道しるべとなるのだ。……序だから言ふが、ヴントは特殊精神科學を歴史科學と社會科學に二大別してゐる。参考の爲に目次にして書いて見れば、こんな具合だ。』

歴史科學

一、文献學

二、文献學的歷史的科學

イ、言語學 ロ、神話學

ハ、藝術學 ニ、凡俗學及凡俗史

三、歴史學

社會科學

心理學的の諸問題

- 一、一般社會學
- イ、社會學
- ロ、土俗學
- ハ、人口學
- ニ、國家學
- 一、國民經濟學
- 三、法律學

そして社會の状態は、みな歴史的發展の所産であるから、歴史科學は社會科學に先んずるといふのである。』

二 心理學の對象

『これで心理學の外的條件の大凡が分つた譯だから、こんどは内的條件に入つて見る。心理學の内容だ。對象だ。精神科學の對象は人類となつたが、心理學の對象は「人類」の中の何であるか？』

『それは一番始めに聞いたぢやないか。心理學は精神現象の科學である、とね。』

『いや、始めから餘り面倒なことを言ふと反つて解りにくいと思つたから、假にさ、言つて置いたのだが、改めてもう少し立ち入つて、それを問題にして見やうと思ふのだ。つまり心理學の研究對象が、果して精神現象であるか、抑々精神現象とは何であるか？』

『面白い。少しぐらゐ六ヶ敷くつても我慢するから、話してくれ。』

『先づ近代心理學の泰斗ヴントの言ふ所を聞かう。曰く、從來の心理學には大體二派あつて、一は「心の學」とし、一は「内部經驗の學」とするが、何れも非だ。前者は「心」といふ實體があつて、心理學はこの實體の活動を研究するもののやうに言ふ。然しさういふ實體を立てることの不都合は、改めて言ふ迄もない。次に内部經驗説の支持者は、經驗的立場をとるから比較的妥當だが、内部經驗の學といふ言葉は、外界が外部感覺に現れ、意識界は内部感覺に現れる、その内部感覺に關する學といふ風に思はれるから不都合である。外部感覺と異なる内部感覺といふものはなく、外部感覺も意識現象である限り心理學の問題であるから、心理學は直接經驗の學であると言はねばならない。即ち、心理學は吾々の経験をそのままに研究し、それを經驗の主體から抽象し、主體獨立の存在として研究する自然科學は間接經驗の學だと言ふ。』

『すると兩者の差は、同一の經驗に對する異なる見方によるもので、對象の差ではないことになるね？』

『さうだ。然し觀察の對象となる爲には、如何なるものも經驗の對象——客體——とならねばならないから、心理學の對象も亦間接であると言へる。だから自然科学も、心理學も觀察すべき對象に注意し、觀察し得たことを記述するのみであるから、兩者の差異は研究態度の差ではなく、考察された對象の差であると見ねばならない。即ち、心理學は精神現象を研究し、他の自然科学は物質現象を研究すると見るが至當だ。』

『精神現象と物質現象との差異如何といふことになるな。』

『ところが、兩者は同一の直接經驗の歸屬の仕方であるから、即ち主體に依屬する現象として直接經驗を辿るときは精神現象となり、主體と獨立した現象として直接經驗を辿れば物質現象が得られる。』

『要するに、純經驗の立場からすれば、直接經驗の内容は物質現象でも精神現象でもないが、その直接經驗を主體に依屬するものとして辿れば精神現象で、そして其の精神現象が心理學の研究對象だと言ふのだね?』

『さう、さう。従つて精神現象は經驗者に即した事實であり、物質現象は主體から獨立したものとして見た現象だから、結局は經驗者を超越した事實を導き出す。例へば色帯は心理現象として見れば七色の感覺の系統だが、物理現象として見れば種々の波長より成るエーテルの波の一系統だ。即ち、物理學的に言へば吾々の目で見える色は假象で、心理的に見ればエーテルは感覺に現れず、ただ思惟されるだけだ。換言すれば、物質的實在は單に示唆されるだけで、自全經驗とはならない。然るに精神現象としての色帯は、吾々の意識に現れる所だけが實在で、それ以外に精神的實在といふものは無い。だからして精神といふものは經驗を超越した存在ではなく、直接經驗に現れる意識現象の總和に外ならない。心理學が精神をば斯くの如く考へるのは、その經驗科學の立脚地から來た當然の結論である。何故といふに、精神現象は意識の統一として、直接に吾々に現れてゐるから、物質現象を統一的に説明する爲の、物質のやうな假定を設けることは全然無益である。この見地から、心理學を直接經驗の學とし、自然科学を間接經驗の科學とすることは、極めて至當であるといふのである。……尤も、これは研究の結果から見た區別で、研究者の觀察する現象が直接的であり間接的であるといふのではない。』

三 心理學の研究法

心理學的の諸問題

『中々骨だ。で、研究法に入つてくれ。』

『心理學の研究に當つては、先づ經驗の省察が出發點だ。然しそれ丈で、精神科學たる心理學の研究に入つたものとは言へない。凡そ科學の研究には、その對象を観察し、實驗し、その結果に推究を加へ、事物相互間の法則を發見し、最後にその法則の正否を證明せねばならない。』

A 内省法

『では先づ自分を觀察する外はあるまい。』

『それが根本的方法だ。内省法又は自己觀察といふがそれだ。然しこれは極めて困難でもあり、不確實でもあり、狭くもある。特に自己特有の現象を以て一般的事實と連斷する弊に堪へない。』
『それでは他人の精神状態を観察するか？』

B 觀察法

『したいものだが、出来ない。だから容貌や身振や、言語や舉動等の外部に現れたものを觀察して、それで他人の精神活動を考究せねばならぬ。これが觀察法又は外部觀察である。この適用範圍は極めて廣いが、兒童心理、動物心理、精神病、犯罪心理等は、これだけでは安全に研究が出来ない。』

C 實驗法

『でも、外に仕様があるまいが……？』

『いや、實驗法がある。これは研究しやうとする事項について、人爲的に或る特別の事情を構成し、特殊の條件の下に觀察する方法だ。例へば皮膚の一定點に、一定の器具で刺激を與へ、その感覺又は反應を検する類であつて、異つた人が同じ經驗を繰り返し得る利便がある。この方法の用ひられるやうになつたのは、最近數十年以來のことであるが、その爲に心理學は長足の進歩を見たのである。』

四 心理學の分科

『心理學の内部にも種々な種類があるだらう。變態心理などといふ言葉を通常耳にするが……？』
『あるとも。研究の對象と方法との違ひによつて、種々な分科を生じて來て居る。然し其の基礎とする事實は、健態なる成人たる人類が、個人で内省した結果である。この事實の研究、つまり一般の成人の有する心的現象の研究に當るものは、一般心理學で、單に心理學といふ場合には此れ

を謂ふのだ。それについて先刻から口を酸っぱくして喋つたわけだ。』

A 対象による分科

『いや、大きに御苦勞。事の序だから、特殊の方も少しばかり願ひたい。』

『概念だけ説明して置かう。研究の対象、及び方法の諸點で、特殊の方面を研究するのが即ち特殊心理學だ。その種類は甚だ多いが、便宜に兩種の心理學の分科を表にして見れば、ざつとこんな具合になる。』

一般心理學……健康——成人——人類——個人——心理學
 X X X
 特殊心理學……變態——兒童——動物——團體——心理學

もう説明までもあるまい。』

『まあ、さう言はずに、約束通り概念だけ説明してくれい。』

『では、第一は變態心理學であるが、これは正常なる心理現象を対象とする健康心理學——即ち一般心理學——に對立して、異常なる心的現象を対象とする心理學だ。この中には、精神病學、犯罪心理學、催眠心理學などが屬する。第二は兒童心理學、これは生れた時から成熟期に達する

時までの、精神發達の過程を研究の対象とするのである。けれども、特に幼年及び少年の心理を研究するものを兒童心理學と呼んで、發達の後期、即ち青年時代の心的現象を研究するものをば、特に青年心理學と呼ぶことがある。』

『何だか、性慾心理學などといふ言葉を聞くが……？』

『性慾は變態ではない。一般心理學の一部分を特に限局して、或はそれを中心として心的現象を研究するものだ。だから性慾のみに限らず、いろいろさういふものがあつていゝ譯だ。尤も變態性慾を対象にすれば、變態心理の一部門にもなる。だが、學的に確然たる特徴のないものでも、「何々心理學」などと矢鱈に言ふのが近頃流行るから、その邊のことも心得て置かねば馬鹿を見る。』

『では元に歸つて、動物心理學と言ふのは？』

『言ふ迄もなく動物の精神について研究するのだ。これは比較心理學とも言はれる。と言ふのは、下等動物から人類に達する各段階の心理現象を、比較研究するところから起つた名だ。最後に團體心理學であるが、これは單なる個人としてではなく、團體の成員としての個人、又は團體を

のもの、心的現象を研究するものだ。例へば、愛國心、輿論、流行等の特殊の現象、及び社會の成員としての個人の心的現象を研究するものは社會心理學で、謂ゆる群集心理などもこの中に含まれる。また人類の精神的發達の段階をば、世界の民族の中に求めて、その精神的所産の中特に神話、習俗、言語、宗教等について比較研究するのが民族心理學である。』

B 方法による分科

『なる程。ところで最初に「對象と方法とについて」と言つたが、方法によつて分けることも出来るのだね。』

『出来る。これは「心理學の研究法」で言つたやうな譯で、先づ内省心理學と實驗心理學との二つになる。そして實驗心理學の中には、更に精神物理學、生理的心理學、行動心理學等が出来て來るといふ按配だ。……かほ沿革的に見れば、知的心理學、感情心理學、聯想心理學、能力心理學、意的心理學などの分科を立てることも出来るのである。だけど……餘り専門的に於るから、一々説明しても覚え切れまい。だからさういふものもあるといふ事だけ覚えて置き給へ。』

五 心理學の應用

『甚だ輕蔑されたものだが、實際だから御説に従はう。……然し、應用方面は是非説明して貰ひたいね。』

『心理學の應用と言つても、先刻も話した通り心理學は凡ゆる精神科學の基礎學であるからして、凡ゆる精神科學に應用されてゐる。寧ろ立脚地とされてゐる。従つて心理學を無視しては存在價値を失つてしまふものも少くない。就中、倫理、美學、教育學、宗教學等は、心理學を無視しては純然たる空想だ。』

『それもさうだが、もつと實際方面に應用されてゐる所を聞きたいのだ。』

『殆んど人間の實際生活の全局面に亘つてゐると言へる。二三の例を挙げれば、

A 醫療と心理學

精神作用が病氣に對して重大なる關係のあることが明かにされて以來、精神治療といふやうなことも行はれて來た。殊に精神病などに對しては、心理學を應用して精神治療を施せば、顯著な効果が擧るのである。よく世間にある心理療法といふのは、大抵催眠心理學の應用らしい。』

B 法律と心理學

『近頃は警察方面でもそんな風なことをすると言ふが？』

『元からあるさ。嫌疑者に心理的試験を施して罪跡の發見に資したり、證人の證言がどの程度まで信用し得られるかに就て、心理的研究を行ふが如き類である。』

C 教育と心理學

『教育方面は勿論だね。』

『もう、これは密接不離の關係にある。教育者は教育心理學は勿論、兒童心理學及び一般心理學の素養がなくては、到底その職を完うすることが出来るものではない。殊に低能兒教育、感化教育に於いて著しい。』

D 修養と心理學

そこから精神作用の過程を心得て置くことは、修養上利益する所が甚だ多い。よく無我夢中で如何とかしたなどといふことがあるが、心理的内省に慣れてゐると度を失はないで済む。心理學上の原理を應用して、記憶の方法や、意志の修練等にも効果を擧げることが出来るのだ。

E 實業と心理學

心理學上の原理を應用して、廣告や販賣等の實務に利益を齎し、職工の勞作や機械の形式の改善などに資し、また従業員の志願者に心理上の實驗を施して適任者を求めるなどは、みな心理學を實業に應用したものだ。殊に最近産業の發達に従つて、従業員の能率問題が喧しくなるにつれて、心理學研究の應用が切實になり、既に能率心理學といふ一分科をさへ生ずるに到つたのである。』

F 社交と心理學

『日常の生活にも必要だらうね。』

『心理學的常識が必要だね。まあ日常生活と言へば、大抵對人關係だ。つまり社交や談話だが、心理學的常識がないといふと兎角に圓滑を缺くからね。話を理解して聞くことが出来ずに、得て陳粉漢で情味がない。だから心理的常識は倫理的觀念と相俟つて、日常生活を圓滿にし、愉快にし、上品にすることが出来るのである。』

『いやあ、御苦勞さま。お蔭で大分益するところがあつた。一通り所謂心理學的常識を得た譯だから、せめて先づ自分の修養と日常生活に應用して見やう。その結果、いよいよ面白くなつて來

れば、もつと専門的な書物も読みたくなるかも知れないから、一寸参考書目を書いてくれないか。』

『中々感心々々。それはちゃんと用意してある。……これだ。どうかまあ、この中一冊でも読む気になることを望むよ。』

六 参考書目

A General

Grundzüge der physiologische Psychologie——Wundt

Grundriss der Psychologie——Wundt

Principles of psychology——J. m. s

Text book of psychology——Titchener

Leitfaden der Psychologie——Lippis

Allgemeine Psychologie nach kritischer Methode——Natorp

Volkmanns Lehrbuch der Psychologie——Herbart

Leitfaden der Physiologische Psychologie——Ziehen

Handbuch der Physiologischen Optik——Helmholtz

ゾントの心理学——須藤新吉著

ゾント心理学要領——速水滉譯著

心理学綱要——元良勇次郎著

心理学演義——福來友吉著

實驗心理学十講——松本亦太郎著

心理学通義——上野陽一著

心理学——高橋穰著

B Special

Adolescence——Stanley Hall

Studies of Childhood——Sully

Die Seele des Kindes——Preyer

兒童心理学精義——上野陽一著

Ueber Psychologie der individuellen Diffeenzen——Stern

心理學の総論

- Mental Development in the child and the Race - - Baldwin
- Animal Intelligence—Thorndike
- Menschen und Tierseele—Wundt
- Sozialpädagogik—Natorp
- Pädagogische Psychologie—Natorp
- 動物物の心——谷津直秀著
- 夢の心理——小熊虎之助著
- 動物心理學——増田維茂著
- 低能兒及劣等兒の心理とその教育——青木誠四郎著

◇圖書總目錄—御入用の節は—

往復ハガキにて御申込次第送呈いたします◇

大正十一年十一月一日印刷
大正十一年十一月七日發行

〔定價金壹圓貳拾錢〕

心理の語
附 奥

編纂者 平 栗 要 三

發行者 茅 原 茂

東京市牛込區市ヶ谷長延寺町六

印刷者 織 田 小 三 郎

東京市本郷區弓町一ノ二五

發行所 世界思潮研究會

東京市本郷區弓町一ノ二五

發賣所

日本評論社出版部

振替東京九六七八番

電話小石川一三六九五番

吾等何を學ぶべき乎

第一期刊行目次・毎月一回刊行

全卷十二冊の詳細なる内容見本御入用の節は二錢切手封入御申込下さい！

(6) 理學士 進化の話を 大久保昶彦著 (人物篇) 既刊	(5) 理學士 進化の話を 大久保昶彦著 (生物篇) 既刊	(4) 松本悟朗著 哲學の話を 既刊	(3) 納武津著 社會の話を 既刊	(2) 文學士 文化の話を 淺野利三郎著 既刊	(1) 文學士 宇宙の話を 淺野利三郎著 既刊
(12) 文學士 地理の話を 淺野利三郎著 三月刊	(11) 法學士 經濟の話を 早坂二郎著 二月刊	(10) 安島健著 宗教の話を 一月刊	(9) 文學士 心理の話を 淺野利三郎著 既刊	(8) マスター・オブ・アーツ弓家七郎著 科學の話を 既刊	(7) 理學士 遺傳の話を 大久保昶彦著 既刊

◇錢五十冊各料送・一均錢十二圓一金冊各價定◇

505
35

終